

『文選集注』江淹「雜体詩」訳注(三)

劉太尉(傷乱) 現

逆瀬川 彰子

18	白日隱寒樹	白日は寒樹に隠る
17	千里何蕭條	千里 何ぞ蕭條たる
16	北望沙漠路	北のかた沙漠の路を望む
15	飲馬出城豪	馬に飲いて城豪を出で
14	愧無古人度	古人の度無きを愧づ
13	空令日月逝	空しく日月をして逝かしめ
12	實以忠貞故	實に忠貞を以ての故なり
11	苟息冒險難	苟息の險難を冒すは
10	桓公遇乃拳	桓公は遇して乃ち拳ぐ
09	寧戚扣角歌	寧戚は角を扣きて歌うに
08	冀与張韓遇	冀わくは張韓の遇に与らん
07	雖無六奇術	六奇の術無しと雖も
06	感激殉馳驚	感激して馳驚に殉う
05	伊余荷籠靈	伊れ 余 籠靈を荷い
04	幽并逢虎拋	幽并は虎拋に逢う
03	秦趙值薄蝕	秦趙は薄蝕に値い
02	天下橫氣霧	天下には氣霧横たわる
01	皇晋遘陽九	皇晋は陽九に遘い

19	投袂既憤滿	袂を投いて既に憤滿し
20	撫枕懷百慮	枕を撫して百慮を懷く
21	功名惜未立	功名 惜しむらくは未だ立たざるに
22	玄髮已改素	玄髮は已に素に改まるを
23	時哉苟有会	時なるかな 苟 <small>まじ</small> に会有り
24	治乱惟冥數	治乱は惟れ冥數なり

〔押韻〕  
○霧・驚・遇・樹・數(去声十遇)、故・度・路・素(去声十一暮)、拋・拳・慮(去声九御)  
※「拳」字については、第九句・第十句の『音決』を参照。

〔校勘〕  
02 天下橫氣霧 「天下橫氣霧」(尤刻本・胡刻本・国子監本・陳八郎本・明州本・秀州本・建州本)  
06 感激殉馳驚 「感激殉馳驚」(陳八郎本・明州本・秀州本・建州本)  
15 飲馬出城豪 「飲馬出城豪」(尤刻本・胡刻本・国子監本・陳八郎本・明州本・秀州本・建州本)  
19 投袂既憤滿 「投袂既憤滿」(尤刻本・胡刻本・国子監本・建州本)  
※明州本・秀州本の第十九句割注には、「善本作懣字」とあり、建州本の割注には、「五臣作滿」とある。しかし、陳八郎本・明州本・秀州本は、「滿」を「懣」に作る。  
23 時哉苟有会 「時或苟有会」(尤刻本・胡刻本・国子

監本

〔訳〕

わが晋朝は「陽九」の災難に見まわれ、天下には悪い氣運が立ちこめてゐる。秦や趙の地は日が蝕まれるかのよう  
に占領され、幽州や并州でも虎が猛威をふるうように賊徒に侵略されてしまった。このとき、わたくしは日頃からの天子の恩に報いるため、心を奮い立たせ、君のために戰場を馳せてまわつたのだつた。もとから陳平のような六つの奇策はもつていなかったが、張良や韓信らが高祖に謁見して仕えられたように、自分もそのようになりたいと願つた。

寧戚は、牛の角をたたきながら歌つたため、斉の桓公と出逢い、そして仕えることになつた。また苟息が危険を物ともせず君のために尽くしたのは、ほかならぬ忠貞の心を成し遂げるためであつた。わたくしは寧戚や苟息のような忠貞の心をもちながらも、為す術もなく、むなしく日々を過ごし、彼ら古の賢人のような度量や才能がないことをはじた。

そのようなことを思いながら、馬に水を飲ませようと、城壁をめぐるの堀に出て、北のかた、砂漠の路をながめた。見わたす限り、千里の遠くまで、なんとさびしくわびしいことであるか。白く輝く太陽は、寒い候の葉を落とした樹木の陰にしないでいく。そんな中、わたくしは袂をはらつて鬱屈とした憤りや憂いにもだえ、そして枕をさすりながら、さまざまな思いをいだくのであつた。

残念なのは、晋室の功名をいまだたて直すことができ  
ないのに、黒髪がもう白髪へと変わり、年老いてしまつたことである。このような世の乱れは、ときの巡りあわせであつて、それは、人間の知ることを得ない天の定めなのである。

【劉太尉（傷乱）琨】

李善曰、臧榮緒晋書曰、琨卒後贈太尉。

鈔曰、於閔懷之間傷其乱離、故作之。詩在本集中及文選。今擬之。

琨字越石、中山魏昌人。祖邁丞相府參軍。父蕃光祿大夫。琨少豪俠有才弁。晋惠帝時、賈謐執□、潘・陸・鄒・□之徒、年雖在謚前、降節友結。号曰、廿四友。琨兄弟亦入焉。統文章志云、早与祖逖□善、嘗□大角枕同寐、聞鷄夜鳴。憲而相□、逖遂墜地。

尚書郎石勒、時為奴虜、已有雄志。朔日上朝臣賢畢會、鳴騶振玉者、成行。勒時皆閉眼無所視。琨于時名位尚卑、出又最晚。勒見其動于色、顧謂儔侶曰、唯此人粗可与我相抗。追而目之、至其所止。琨後得至并々々。州々承乱離之後、接際群夷。

石勒劉聰、連相攻敵。琨撫納、移年抗拒。後石勒破姬澹、并州遂亡。琨走遼西、投段匹磾請救。磾忌而害之。琨既有

勇氣、兼善文章。初元皇雖葺濟江東、猶謙讓、未即位。琨遣長史温嶠奉表勸進。其略曰、天未絕晉、必將有主晉祀者、非陛下而誰。

王敦見而大忿曰、讀左伝卅年、而今見劉琨得其語矣。初江左逮創、英賢畢集。時人猶恨琨不過焉。周伯曰、江東地狹、不容琨氣。

劉良曰、此擬贈廬諶詩也。

李善曰く、臧榮緒の晋書に曰く、琨の卒後に太尉を贈る、と。

鈔に曰く、閔懷の間に於いて其の乱離するを傷む、故に之を作る。詩は本集中及び文選に在り。今之れに擬う。

琨字は越石、中山魏昌の人なり。祖の邁は丞相府の参軍なり。父の蕃は光禄大夫なり。琨は少きより豪侠にして才弁有り。晋の惠帝の時、賈謐は政を執り、蕃・陸・鄒・左の徒、年は謐の前に在りと雖も、降節して友結す。号して曰く、廿四友と。琨の兄弟も亦た入ると。

続文章志に云う、早に祖逖と友とし善し、嘗て二大角枕もて同に寐ね、鶏の夜に鳴くを聞く。憲びて相い蹋み、逖は遂に地に墜つ。

尚書郎の石勒は、時に奴虜と為るも、已に雄志有り。朔日上朝の臣賢畢く会し、鳴騶振玉する者、行を成す。勒

は時に皆な眼を閉じて視る所無し。琨は時に于いて名位尚お卑く、出づるも又た最も晩し。勒は其の色を動かすを見、顧みて儔侶に謂いて曰く、唯だ此の人のみ粗ぼ我と相抗すべし、と。追いて之を目せんとし、其の止むる所に至れり。琨は後に并州に至るを得たり。并州の乱離を承くるの後、群夷に接し際す。

石勒劉聡、連ねて相敵を攻む。琨は撫納すれども、年を移して抗拒す。後に勒は姫澹を破り、并州は遂に亡ぶ。琨は遼西に走り、段匹磾に投じて救いを請う。磾忌みて之を害す。琨は既に勇氣有り、兼ねて文章を善くす。初め元皇葺されて江東に済ると雖も、猶お謙讓し、未だ即位せず。劉琨は長史の温嶠を遣わして勸進を表し奉らしむ。其の略に曰く、天は未だ晋を絶たず、必ず將に晋祀を主る者、有らんとす、陛下に非ずして誰ぞと。王敦は見て大いに忿して曰く、左伝を読むこと卅年、而今劉琨の其の語を得るを見ると。初め江左に創まるに逮び、英賢畢く集まれり。時人猶お琨の過ぎざるを恨むなり。周伯曰く、江東地狭く、琨の氣を容れず、と。

劉良曰く、此れ廬諶に贈る詩に擬うなり、と。

「校勘」

○李善曰 該当箇所無し（尤刻本・胡刻本・国子監本）、

「善曰」〈明州本・秀州本・建州本〉

○賈謐執口 羅振玉著『羅雪堂先生全集』六編（十四）

(大通書局、一九七六。以下、羅本とする。)は、集注本の余白箇所を「政」字としている。『晋書』卷六十二・劉琨伝に「秘書監賈謐、参管朝政(秘書監の賈謐は、朝政を参管す)」とあるため、「政」字に相違ないだろう。これに従って、「政」字を補う。

○潘・陸・鄒・□之徒 集注本の不鮮明箇所を、羅本は「佐」字としている。しかし、『晋書』卷四〇・賈謐伝に「南陽鄒捷、斉国左思」とあり、「鄒捷」の次に「左思」の名が挙げられている。おそらくは左思のことであろう。これに従って「左」字を補う。

○早与祖邁□善 羅本は、不鮮明箇所を「友」としている。これに従って「友」字を補う。

○嘗□大角枕 羅本は、不鮮明箇所を「二」としている。これに従って「二」字を補う。

○憲而相□ 羅本は、不鮮明箇所を「躡」としている。これに従って「躡」字を補う。

○劉良曰 「良曰」(陳八郎本・明州本・秀州本・建州本)

○此擬贈廬謐詩也 「此擬贈廬謐詩」(「也」を欠く)(陳八郎本・明州本・秀州本・建州本)

「訳」 李善はいう、臧榮緒の『晋書』にいう、「琨の亡くなつ

た後に太尉の称号を与えた」と、と。

『鈔』にいう、「(劉琨は)懷帝・閔帝の世において、政治の情勢が混乱を期していたことを悲しみ、それゆえにこの詩を作った。またこの詩は、別集や『文選』に見られる。江淹は劉琨の詩に擬えて、この詩を作ったのである。

琨の字は越石、中山魏昌の人である。また祖父の邁は丞相府の参軍であり、父の蕃は光禄大夫である。劉琨は若いころから男だてがあり、弁舌の才能をもっていた。晋の恵帝の時、賈謐が政治の実権をにぎっており、潘岳・陸機・鄒捷・左思らは、年齢は賈謐よりも年をとっていたが、彼にへりくだって仕えていた。彼らを名付けて二十四友といった。さらにそこには、劉琨の兄弟も入っていた。

『続文章志』にいう、劉琨は若いころから祖逖と友として仲が良く、二人は一つの寢床に角飾りのついた鮮やかな枕を二つ並べて一緒に寝ていた。(すると)鶏が夜半に鳴くのを聞いた。夜半に鶏が鳴くことは悪い前兆だと思っていたが、そうではなかったため二人は喜び騒いで、祖逖はそのまま寢床からおちてしまった。

尚書郎の石勒は、当時捕虜の身であったが、すでにその心の中には壮大な理想をもっていた。月初めの日に朝廷へ赴く賢者たちがみな残らず集まり、供回りの者たちは彼らの出発する準備をしていた。石勒は、そのとき完全に目を閉じてその様子を見ることはなかった。劉琨は、そのころまだ官位が低かったため、出陣するのが遅くなった。石勒は劉琨の顔つきが変わったのを感じ、振りかえって仲間にあることには、「こいつただけだ、わたしと互角に対抗しあ

うことができるのは」と。それで、石勒は劉琨を追って彼と面会してみようと、劉琨がどまっているところまでいたったのである。劉琨は、その後并州にいたる。そして、并州が政乱を受けた後に、幽州刺史である段匹磾と接触した。

石勒と劉琨は、一緒になつて敵方を攻めていく。劉琨はそれをいたわり迎えたが、その一年後には彼らを拒んだ。その後劉琨は姫澹を破り、并州はそのまま滅ぶにおよんだ。そこで劉琨は遼西へ逃げ、幽州刺史で鮮卑族である段匹磾をたよつて救いを求めた。しかし段匹磾はそれを嫌がつて劉琨をにくんだ。そのような中でも劉琨は、もとより何事にも臆しない心をもっており、その上文章も得意であつた。はじめ東晋の元帝は急かされるようにして遠く江東へと揚子江を渡ろうとしたけれども、それでも元帝はへりくだり、いまだ即位しなかつた。そこで、劉琨は部下である長吏の温嶠を遣わせて、元帝が即位するように勧め上表させた。その内容をかいつまんでいうと、「天はいまだ晋朝を滅ぼしてはいない。必ず今すぐに晋の祀をつかさどる者を立てなくてはならない。陛下のほかに誰がいようか」と。王敦は、劉琨の「勸進表」を見て大いに怒つていう、「わたくしは『左氏伝』を読みはじめてから三十年たつたが、今になつて劉琨が『左氏伝』のことばをよく熟知していたことを見ることができる。初めて元帝が東晋に創業したとき、才ある者たちが残らず集まってきた。その当時の人は依然として、劉琨が川をこえて東晋の都まで渡つて来られな

つたことを残念に思っている。周伯はいう、江東の地は狭いため、劉琨の気概を受け入れることができなかつたのだ」と、と。

劉良はいう、この詩は「盧諶に贈る詩」に擬える、と。

〔注〕

① 臧栄緒晋書曰：臧栄緒の『晋書』は、すでに散佚している。この劉喬伝には、「文選江文通雜体詩注」として「琨卒後贈太尉」とあり、劉琨は死後、太尉についたとする。なおこの文章は、清・湯球輯『九家旧晋書輯本』（『百部叢書集成』所收。芸文印書館、一九六〇）に輯佚されている。

② 鈔 「鈔」とは、『文選鈔』のことである。『日本国見在書目録』（『古逸叢書』所收、江蘇広陵古籍刻印社影印。楊州古籍書店、一九九〇）には、「文選鈔六十九 公孫羅撰」とある。しかし撰者は無名であるという説もあり、そのことについては、森野繁夫・富永一登氏による「文選集注所引『鈔』について」（『日本中国学会報』第二十九集、一九七七）に詳しい。

③ 閔懷 「閔」「懷」はそれぞれ、西晋の帝の諡である。「閔」は、建興年間（三一六・三一七）をおさめた第四代皇帝司馬鄴（愍帝）の諡。「愍」字に「閔」字をあてたのは、唐の太宗・李世民の「民」のつくりが、「愍」字と同意であるためと、「愍」と「閔」の発音が近いためではな

いだらうか。また「懐」とは、永嘉年間（三〇七・三一六）をおさめた第三代皇帝司馬熾（懐帝）の諡である。

④ 琨字越石：『晋書』卷六十二・劉琨伝に「劉琨字越石、中山魏昌人、漢中山靖王勝之後也。祖邁有経国之才為相国参軍散、騎常侍。父蕃清高冲儉位至光禄大夫（劉琨字は越石、中山魏昌の人なり。漢の中山靖王勝の後なり。祖の邁は経国の才有りて相国参軍、散騎常侍と為る。父の蕃は清高、冲儉にして位は光禄大夫に至る）」とある。

⑤ 号曰、廿四友：『晋書』劉琨伝に「石崇・歐陽建・陸機・陸雲之徒、並以文才降節事諡。琨兄弟亦在其間、号曰二十四友（石崇・歐陽建・陸機・陸雲の徒、並んで文才を以て降節し諡に事える。琨の兄弟も亦た其の間に在り、号して曰く二十四友と）」とある。また、『晋書』卷四十・賈謐伝に「著文章称美諡、以方賈誼。渤海石崇・歐陽建、祭陽潘岳、吳国陸機・陸雲、蘭陵繆徵、京兆杜斌・摯虞、琅邪諸葛詮、弘農王粹、襄城杜育、南陽鄒捷、斉国左思、清河崔基・沛国劉瓌、汝南和郁・周恢、安平索秀、潁川陳畛、太原郭彰、高陽許猛、彭城劉訥、中山劉輿・劉琨皆傳会於謚、号曰二十四友。（文章を著し諡を称美し、以て賈誼に方ぶ。渤海の石崇・歐陽建、祭陽の潘岳、吳国の陸機・陸雲、蘭陵の繆徵、京兆の杜斌・摯虞、琅邪の諸葛詮・弘農の王粹、襄城の杜育、南陽の鄒捷、斉国の左思、清河の崔基、沛国の劉瓌、汝南の和郁周恢、安平の索秀、潁川の陳畛、太原の郭彰、高陽の許猛、彭城の劉訥、中山の劉輿・劉琨は皆な諡を傳会し、号して二十四友と曰う。）」

とあり、二十四の名が列挙される。

⑥ 続文章志 『続文章志』は、『隋書』卷三十三・経籍志に「続文章志 二卷 傅亮撰」とあるが、散佚している。長谷川滋成氏「『文選鈔』の引書」（『日本中国学会報』第三十二集、一九八〇）によれば、『続文章志』は「文人の伝記を書き記したもので、その一つ一つはかなりの長さをもっていたのではないか」とある。

⑦ 祖逖 祖逖（二六六・三二一）は、字は士稚。范陽・遼の人。劉琨とともに「雄豪」で著名であった。『晋書』卷六十二・祖逖伝に「年二十四、陽平辟察孝廉、司隸再辟与秀才、皆不行。与司空劉琨、俱為司州主簿、情好綢繆、共被同寢。中夜聞荒鷄鳴、蹴琨覺曰、此非惡声也。因起舞。逖並有英氣、每語世事、或中宵起坐、相謂曰、若四海鼎沸、豪傑並起、吾与足下当相避於中原耳（年二十四にして、陽平に辟して孝廉に察し、司隸 再び秀才に辟挙すれども、皆な行かず。司空の劉琨と、俱に司州主簿と為り、情好綢繆にして、共被して寢ぬ。中夜に荒鷄の鳴くを聞き、琨を蹴り覺まして曰く、此れ惡声に非ざるなりと。因りて起きて舞う。逖・琨並んで英氣有り、世事を語る毎に、或は中宵に起坐し、相い謂いて曰く、四海 鼎沸するが若く、豪傑にして共に起ち、吾は足下と相い中原を避くるのみと）」とある。なお、同様の文章は『世說新語』賞誉にも見える。

⑧ 角枕 「角枕」は、『詩経』唐風・葛生に「角枕粲兮、錦衾爛兮（角枕 粲たり、錦衾 爛たり）」とあり、その孔穎達疏に「角枕粲然而鮮明（角枕は粲然として鮮明な

り」とある。

⑨尚書郎 「尚書郎」は、もともと文書をつかさどる官職名であった。しかし魏晉以降、尚書郎と称し、中央官庁として政局を担い、六つの局（曹）が置かれた。その局の一つに軍事をつかさどる役職がある。石勒（五胡十六国・後趙の初代皇帝）の職歴には、尚書郎の肩書きは見えない。しかし、最終役職である大司馬（軍事の長官）は、唐代ごろから「兵部尚書」と称されている。そのため、文章中で「尚書郎石勒」としたか。なお、「尚書郎」は上級官吏の総称として用いられることもある。

⑩石勒 石勒（二七四・三三三）は、字は世龍、小字は匄勒（または匄）といった。『魏書』卷九十五・羯胡石勒伝には、若いころ并州の饑餓に遇い、彼を含む羯族は一族離散していた。その最中に司馬騰に捕らえられ、師權に売られ奴隸となったことが記載されている。のちに自由の身となった石勒は、八王の乱（二九〇・三〇六）を経て台頭していく。

『晋書』劉琨伝の「上愍帝請北伐表」に「勒拋襄国、与臣隔山、寇騎朝發、夕及臣城、同惡相求、其徒実繁。自東北八州、勒滅其七、先朝所授、存者唯臣。是以勒朝夕謀慮、以凶臣為計、闕伺間隙、寇抄相尋。戎士不得解甲、百姓不得在野。天網雖張、靈沢未及、唯臣子然与寇為伍。自守則稽聦之誅、進討則勒襲其後、進退唯谷、首尾狼狼（勒は襄国に抛りて、臣と山を隔つ、寇騎 朝に発すれば、夕に臣の城に及ぶ、同惡 相い求め、其の徒 実に繁し。東北よ

り八州、勒は其の七を滅ぼし、先朝の授くる所、存する者は唯だ臣のみ。是を以て勒は朝夕謀慮し、凶を以て臣に計を為し、間隙を闕伺し、寇抄して相い尋ぐ。戎士は甲を解くを得ず、百姓は野に在るを得ず。天網 張ると雖も、靈沢 未だ及ばず、唯だ臣 子然として寇と伍を為す。自守せんとすれば則ち聦の誅を稽めん、進討せんすれば則ち勒 其の後を襲わん、進退せんとすれども唯だ谷り、首尾狼狼す」とある。

このように石勒と劉琨によつて、板挟みの状態にあつた劉琨は、のちに「勢転盛」であつた石勒によつて、并州を降されてしまうのである。なお、石勒の伝は『晋書』卷百四・百五にもある。

⑪鳴騶 「鳴騶」は、『洛陽伽藍記』卷三に「（高陽王雍）自漢晉以來諸王豪侈、未之有也。出則鳴騶御道、文物成行（漢晉以來より諸王の豪侈、未だ之れ有らざるなり。出づれば則ち鳴騶御道、文物行を成す）」とある。ここでは、高陽王雍の出行にあたって、供回りの者たちが道をあけ、すばらしい儀仗をもつて出發するといった豪華であるさまをいう。つまり、ここでの「鳴騶」は、尊い人が車馬で出行する際の従者をさすのだろう。

⑫劉聦 劉聦（？・三一八）は、字は元明。劉曜や石勒らを臣下につけ、西晋を攻めるよう命じた。永嘉の乱（三一一年）では懷帝を捕らえて洛陽を陥落させ、のちの三一年、愍帝の死をもつて西晋を滅ぼさせた。『魏書』卷九十五・『晋書』卷百二に伝がある。

⑬ 姫澹 姫澹は、仕えていた猗廬が崩御したため、劉琨に帰順し并州の存亡に奮闘した(三一六)。伝は『魏書』卷二十三にある。『晋書』卷百四・石勒載記上に「勒攻樂平太守韓拋于玷城、劉琨遣將軍姫澹率衆十余万討勒。琨次広牧、為澹声援、勒将距之……勒輕騎与澹戰、偽收衆而北。澹縱兵追之、勒前後伏發、夾擊、澹軍大敗、獲鎧馬万匹。澹奔代郡、拋奔劉琨。琨長史李弘以并州降于勒、琨遂奔于段匹磾。(勒は樂平太守韓拋を玷城に攻め、劉琨は將軍の姫澹をして遣わせ衆すること十余万を率いて勒を討たしむ。琨は広牧に次り、澹に声援を為すも、勒は将に之を距む……勒の輕騎は澹と戦い、偽りて衆を收めて北ぐ。澹は兵に縦にして之を追うも、勒 前後より伏發、夾擊し、澹の軍大いに敗れ、鎧馬万匹を獲らる。澹は代郡に奔り、拋は劉琨に奔る。琨の長史李弘は并州を以て勒に降り、琨は遂に段匹磾に奔る)とある。

このことで劉琨は身動きが取れなくなり、幽州刺史であった段匹磾のもとに抛ったのである(三一六)。翌年、段匹磾とともに石勒討伐を試みたが、失敗に終わっている。

⑭ 温嶠 温嶠(二八八・三二九)は、字は太真、太原・祁の人。司徒羨弟の子。劉琨に命を受け、司馬睿を勧進させた。『晋書』劉琨伝に「是時西都不守、元帝称制江左、琨乃令長史温嶠勸進、於是河朔征鎮夷夏一百八十人連名上表(是れ時に西都守らず、元帝は江左を称制し、琨は乃ち長史温嶠をして勸進せしむ、是に於いて河朔に征鎮する夷夏一百八十人 連名させ上表せしむ)」とある。

⑮ 其略曰：ここでは、劉琨の草稿した「勸進表」が要約されている。「勸進表」とは、長安の陥落に伴い、懷帝が捕らえられたため、次の明君を立てようと劉琨が作った表のことである。その「勸進表」(『文選』卷三十七)に「天祚大晋、必将有主。主晋祀者、非陛下而誰(天は大晋を祚し、必ず将に主有らんとす。晋の祀を主る者、陛下に非ずして誰ぞ)」とあり、その李善注には「左伝介之推曰、天未絶晋、必将有主。主晋祀者、非君而誰(左伝に介之推曰く、天は未だ晋を絶たず、必ず将に主有らんとす。晋の祀を主る者、君に非ずして誰ぞと)」と見える。また集注本は、「必将有主」を「必将有」(「主」字を欠く)に作る。なお同様の文章は、この他『晋書』卷六・元帝紀や『史記』卷三十九・晋世家第九にもあるが、文字の異同が多い。

⑯ 王敦 王敦(二六六・三二四)は、字は処仲、王導の従兄。元帝が東晋に渡る際、王導らとともに元帝の補佐役を担った。のちにその大功によって朝廷を恣にした王敦は、帝位を狙うようになり側近を誅殺する名目で兵を挙げるも、結局明帝に破られた。このため、王敦と劉琨は犬猿の仲である。『建康実録』卷五に「敦大怒投表於地曰、讀左伝三十年、一朝為劉琨用。却因内憚焉(敦大いに怒りて表を地に投じて曰く、左伝讀むこと三十年、一朝にして劉琨の用を為す。却て内に因りて憚る)」とある。「表」とは、「勸進表」のこと。王敦が激怒したのは、彼が創業の功績をきっかけに帝位に就くことを目論んでいた最中、劉琨が「表」を草稿したためであろう。なお、『晋書』卷九十八

・王敦伝に「学通左氏」とあり、王敦の学識は『左氏伝』に通暁している。

⑰周伯曰：『建康実録』卷五に「及帝将中興於江東、中朝士大夫多過江、帰帝、朝廷望之、怨琨不至。王処仲曰、江東地狭、不容琨氣（帝 将に江東に中興せんとするに及んで、中朝の士大夫 多くは江を過ぐれども、帝に帰すること 朝廷之を望むに、琨の至らざるを怨む。王処仲曰く、江東 地狭く、琨の氣 容れずと）」とある。「王処仲」とは、王敦のこと。李善注はこの発言をする人物を「周伯」としてゐるが、『建康実録』は「王処仲」に作る。

⑱贈盧諶詩 「贈盧諶詩」とは、劉琨の「答盧諶詩」のことか。「答盧諶詩一首并書」は、『文選』卷二十五に収められ、全九十六句からなる作品である。盧諶（二八四・三五〇）は、盧志の子、字は子諒、范陽涿郡の人。『晋書』卷四十四・盧諶伝に「清敏有理、思好老莊、善属文（清敏にして理有り、思は老莊を好み、文を属るを善くす）」とある。彼は劉琨が并州刺史のころ仕えていたが、懐帝の時になつて、段匹磾に自ら投じることゝをのぞみ、劉琨に手紙と詩をおくつた。「答盧諶詩」は、その詩に対する返答である。そこで劉琨は盧諶との在りし日を偲び、また晋朝が戦乱に翻弄されるかなしみを嘆き、うたつてゐる。

鍾嶸『詩品』卷中に「善為悽戾之辞、自有清拔之氣、琨既体良才、又罹厄運、故善叙喪乱、多感恨之詞（善く悽戾の辞を為り、自ら清拔の氣有り、琨は既に良才を体し、又た厄運に罹る、故に善く喪乱を叙し、感恨の詞多し）」と

ある。

01 02 【皇晋遘陽九 天下横氣霧】

李善曰、劉琨答盧諶詩曰、厄運初遘、陽爻在六。哀我皇晋、痛心在目。漢書、陽九厄日、初入百六陽九。音義曰、易伝、所謂陽九之厄百六之会者也。郭璞山海經注曰、横、塞也。楚辞曰、埃時風之清激、愈氛霧其如塵。

鈔曰、皇、大也。遘、遇也。易无妄占云、一元之中、有九厄、有陰厄四、陽厄五、陽厄主旱、陰厄主水。若不爾、即廢置君王。故曰、百六之会、陽九之厄也。横、縦横也。氛、妖氣也。霧、昏也。

音決、遘、古候反、氛、音粉。

張銑曰、九陽數之極有交。横、氛霧、喻乱賊也。言大晋遇此陽九之災、而乱賊横叛也。陸善経曰、陽九、災厄之運也。

李善曰く、劉琨の盧諶に答うる詩に曰く、厄運 初め遘いて、陽爻は六に在り。我が皇晋を哀しみ、心を痛ましむること目に在りと。漢書に曰く、陽九の厄日初めて百六の陽九に入ると。音義に曰く、易伝の所謂陽九の厄は百六の会なる者なりと。郭璞の山海經注に曰く、横は、塞なりと。楚辞に曰く、時風の清激するを埃つも、愈いよ氛霧たること其れ塵の如しと、と。

鈔に曰く、皇は、大なり。遭は、遇なり。易无妄占に云う、一元の中に九厄有り、陰厄は四、陽厄は五有り。陽厄は旱を主り、陰厄は水を主ると。若し爾からずんば、即ち君王を廢置せん。故に曰く、百六の会は陽九の厄なり。横は、縦横なり。氛は、妖気なり。霧は、昏なり、と。横音決に、遭、古候の反、氛、音は粉なりと。

張銑曰く、九は陽数の極に交有り。氣霧横たえりとは、乱賊に喩うるなり。言は大晋の此れ陽九の災いに遇いて、乱賊の横叛するなり、と。

陸善経曰く、陽九とは、災厄の運なり、と。

〔校勘〕

○李善曰 該当箇所無し（尤刻本・胡刻本・国子監本）、  
「善曰」（明州本・秀州本・建州本）

※「漢書」の直前に「陽九」が挿入されている。（国子監本・明州本・秀州本・建州本）

○漢書 「班固漢書曰」（尤刻本・胡刻本・国子監本）、  
「漢書曰」（明州本・秀州本・建州本）

○陽九厄日 「陽九日」（「厄」字を欠く）（尤刻本・胡刻本・国子監本・明州本・秀州本・建州本）

○陽九之厄百六之会者也 「陽九日厄会也」（「百六之」  
「者」字を欠く）（尤刻本・胡刻本・国子監本・明州本・秀州本・建州本）

○楚辞曰 「楚詞曰」（尤刻本・胡刻本・国子監本・明州本・建州本）

○候時風之清激 「望時風之清激」（尤刻本・胡刻本・国子監本・明州本・秀州本・建州本）

○愈氛霧其如塵 「愈氛霧其」（「如塵」の二字を欠く）（国子監本）

○張銑曰 「銑曰皇大也」（陳八郎本・明州本・秀州本・建州本）

○九陽数之極有交 「九陽数之極有災」（陳八郎本・明州本・秀州本・建州本）

○而乱賊横叛也 「而乱賊横叛」（「也」字を欠く）（陳八郎本・明州本・秀州本・建州本）

〔訳〕

李善はいう、劉琨の「盧諶に答うる詩」にいう、「災いの氣運にはじめて遭い、皇帝の權威も極まり尽くし災禍に見まれてしまった。晋朝の運命をかなしみ、眼前に広がる光景に心を痛めさせられた」と。「漢書」にいう、「災いが起こるといふ忌み慎むべき日にはじめて百六年で訪れる厄運に入った」と。「音義」にいう、「『易伝』のいわゆる「陽九」の災いは、百六の会という百六年で訪れる厄運のことである」と。郭璞の『山海経』注にいう、「横とは塞（ふさがる）のことである」と。「楚辞」にいう、「君の政治が潔白であり、下々の者を教化することをのぞんでいたが、いよいよ世間の氣運は悪くなるばかりで、そのさまはまるで俗にまみれるようであった」と、と。

『鈔』にいう、「皇」は、非常にすぐれていることであ

る。「遭」は、遭遇することである。『易无妄占』にいう、「物事のはじまりには九つの厄があつて、その内訳は陰厄が四つ、陽厄が五つである。陽厄は旱魃をつかさどり、陰厄は洪水をつかさどる」と。もしそのような悪運にあるのであれば、新たに君をたてなければならぬだろう。そのため、百六の会は、陽九の厄運といわれるのである。「横」は、覆われることであり、「氛」は不吉な気配のことである。また「霧」はくらいということである、と。

『音決』に「遭」は古候の反、「氛」は、音は粉である、と。

張銑はいう、九は陽数の極まることであり陰と入れ交わるのである。悪い気運に覆われることは、世が乱れることとたとえているのである。つまり、晋朝がこのような陽九の災いに遭遇して乱賊が晋を滅ぼそうしていることをいうのである、と。

陸善経はいう、「陽九」とは災いの気運である、と。

### 〔注〕

① 氛 集注本以外の尤刻本・胡刻本・国子監本・陳八郎本・明州本・秀州本・建州本はみな、「氣」を「氛」にする。「氛」はもともと吉凶、両方の運氣を意味していたが、のちに悪い運氣を主にさすようになった。『春秋左氏伝』昭公十五年に「吾見赤黒之祲。非祭祥也。喪氛也（吾、赤黒の祲を見る。祭祥に非ざるなり。喪氛なり）」とあり、その杜預注に「氛、悪気也」とある。また『漢書』卷九・

元帝紀に「百姓愁苦、靡所錯躬。是以氛邪歲増、侵犯太陽（百姓、愁苦して、躬を錯く所靡し。是れ氛邪を以て歳ごとに増し、太陽を侵犯す）」とあり、その顔師古注に「氛、悪気也」とある。

② 劉琨答盧諶詩曰：劉琨の「答盧諶詩」（『文選』卷二十五、全九十六句）に「厄運初遭、陽爻在六」（第一句・第二句）、「哀我皇晋、痛心在目」（第十一句・第十二句）と、それぞれある。「厄運初遭、陽爻在六」の張銑注には、「在六、謂乾卦第六画。辞云、亢龍有悔、喩天子運極、而有窮厄之災（六に在りとは、乾卦の第六画を謂う。辞に云く、亢龍、悔い有りとは、天子の運極まるに喩う、而して窮厄の災有り）」とあり、その李善注には「言晋遇災也。周易曰、上九、亢龍有悔、盈不可久也。陽爻在六、謂乾上九也（晋の災に遇うを言うなり。周易に曰く、上九、亢龍、悔い有りとは、盈つれば久しかるべからず。陽爻、六に在りとは、乾の上九を謂うなり）」とある。つまり、天子の運が極まって災禍がおこつたことをいうのである。

③ 漢書：『漢書』卷二十一・律歴志上に「易九疋曰、初入元、百六、陽九。次三百七十四、陰九（易の九疋に曰く、初め元に入ること、百六は、陽九なり。次の三百七十四は、陰九なり）」とあり、その孟康注には「易伝也。所謂陽九之疋、百六之会者也。初、入元、百六歳有疋者、則前元之余氣也（易伝なり。所謂陽九の疋は、百六の会という者なり。初め、元に入ること百六歳にして疋有るは、則ち前元の余氣なり）」と見える。

④音義曰：李善注に見える『漢書音義』引『易伝』は、『周易』に該当箇所は見られない。『後漢書』卷百二・董卓伝に「百六有会、過剝成災（百六 会有りて、過剝災を成す）」とあり、その李善注にも既出（注②）の『漢書』律歴志上と同様の文章が見える。「百六之会」とは、百六年でおこる厄運のことをいうのだろう。なお、『後漢書』に先立つ用例として、『漢書』卷八十五・谷永伝に「遭无妄之卦運、直百六之災阨（无妄の卦運に遭うは、百六の災阨に直る）」とある。

⑤郭璞山海経注曰：李善注にある『山海経』注は、現存の『山海経』には見られない。しかし、『山海経』注「横塞也」という李善は、劉琨と同時代の木華「海賦」（卷十二）の「魚則横海之鯨、突扞孤遊（魚は則ち横海の鯨、突扞として孤遊す）」にも同様の注を附している。その他、左思「招隱詩二首其一」（卷二十二）の「杖策招隱士、荒塗横古今（策を杖きて隠士を招かんとす、荒塗 古今に横たわれり）」の注にも見られる。

⑥楚辞曰：『楚辞』九歎・惜賢に「埃時風之清激兮、愈氛霧其如塵」とあり、「兮」字に作る。その王逸注は「言已欲待明君之政清潔之化、以感激風俗、而君愈貪濁、如氛霧之氣来（言は已に明君の政 清潔の化するを待ち、以て風俗に感激せんと欲す、而れども君 愈いよ貪濁すこと、氛霧の氣 来たるが如し）」とある。

「清激」については、『楚辞』九歎・愍命に「或沈淪其無所達兮、或清激其無所通（或は沈淪して其れ達する所無

し、或は清激して其れ通ずる所無し）」とあり、その洪興祖補注に「此言沈淪於世俗者、困而不能達。清激以自厲者、介而不能通（此に言は世俗に沈淪する者は、困しみて達すること能わず。清激して以て自ら厲する者は、介して通ずること能わず）」とある。

⑦易无妄占 『易占』について、『玉函山房輯佚書続編』（清・王仁俊輯、上海古籍出版社、一九八九）に書名が収められている。なお、『続修緯書集成』卷一（安居香山・中村璋八編、明德出版、一九八一）は、収録していない。また、『漢書』律歴志上（既出注②）・『後漢書』董卓伝の李善注引前書音義（既出注③）に、この箇所とほぼ同文が見られる。

### 03 04 【秦趙值薄蝕<sup>①</sup> 幽并逢虎<sup>②</sup> 虎<sup>③</sup>】

李善曰、薄蝕・虎<sup>①</sup>、喻群盜也。京房易飛候曰、凡日蝕皆於晦朔。不於晦朔蝕者、名薄。戰国策、蘇秦説楚威王、興師襲秦、戰於藍田。此所謂兩虎相<sup>②</sup>也。

鈔曰、謂姚泓称秦、石勒称趙。日月・薄食、禍乱之徵。此二処百姓皆為此二人所破、逢災害也。劉聰石勒、破幽并二州、自<sup>③</sup>扞之如虎狼之為也。

音決、蝕、音食。

李周翰曰、秦姚泓所<sup>①</sup>扞、趙石勒所<sup>②</sup>扞、幽州段匹磾所<sup>③</sup>扞、并州劉琨所領。值亦逢也。薄蝕論乱賊侵晋、武<sup>④</sup>扞喻威武之

盛也。

陸善経曰、秦趙幽并、終並為劉聡・石勒所陷。薄食・虎  
抛、言被侵逼也。逼也。

李善曰く、薄蝕・虎抛は、群盜に喩うるなり。京房の易  
飛候に曰く、凡そ日の蝕するは皆な晦朔に於いてす、晦朔  
に於いて食せざるは、薄と名づく。戦国策に、蘇秦 楚  
の威王に説く、師を興して、秦を襲いて藍田に戦うと。此  
れ所謂兩虎の相い抛るなりと、と。

鈔に曰く、姚泓 謂いて秦と称し、石勒を趙と称す。日  
月の薄食するは、禍乱の徴なり。此の二処の百姓は皆な此  
の二人の破る所と為り、災害に逢えり。劉聡・石勒 幽并  
の二州を破り、自ら抛すること 虎狼の為の如きなり、  
と。

音決に、蝕、音は食なり、と。

李周翰曰く、秦は姚泓の抛る所、趙は石勒の抛る所、幽  
州は段匹磾の抛る所、并州は劉琨の領むる所なり。値も亦  
た逢なり。薄蝕は乱賊の晋を侵するに喩え、武抛は威武の  
盛んなるに喩う、と。

陸善経曰く、秦趙幽并は終に並びに劉聡・石勒の陥る所  
と為る。薄食・虎抛、侵逼せらるを言うなり、と。

〔校勘〕

○李善曰 該当箇所無し（尤刻本・胡刻本・国子監本）、  
「善曰」（明州本・秀州本・建州本）

○京房易飛候曰 「京房易飛候占曰」（尤刻本・胡刻本  
・国子監本・明州本・秀州本・建州本）

○凡日蝕皆於晦朔 「日蝕皆於晦朔」（凡「字を欠  
く」（国子監本）

○戦国策 「戦国策曰」（尤刻本・胡刻本）

○此所謂兩虎相抛者也 「此所謂兩虎相抛也」（尤刻  
本）

※集注本は「王興師」の「興」字の横に、「日」字が細字  
で補われている。

○李周翰曰 「翰曰」（陳八郎本・明州本・秀州本・明  
州本）

○薄蝕論乱賊侵晋 「薄蝕論乱賊侵晋」（陳八郎本・明  
州本・秀州本・明州本）

○武抛喩威武之盛也 「虎抛喩威武之盛」（「也」字を  
欠く）（陳八郎本・明州本・秀州本・建州本）

※陸善経注には、「逼也」が二度書かれている。おそらく  
は、衍字と見られる。行数・字数を調整するために、この  
ような重複があるのだろう。

〔訳〕

李善はいう、薄蝕・虎抛は、晋朝に侵略してくる大勢の  
賊にたとえている。京房の『易飛候』にいう、「一般的に  
太陽が隠れるのは、すべて（新月になる）晦日と朔日にみ  
られるものである。晦日と朔日でもないのに太陽が隠れる  
ことは、薄と名付けられる」と。『戦国策』に「蘇秦が楚

の威王に説いていう、(楚の懷王は)非常に怒って、兵を挙げ秦に襲来し、藍田にて戦ったのである」と。このことは、いわゆる「二匹の虎が互いにつかみあう」ということである、と。

『鈔』にいう、姚泓の治める所は秦といい、石勒の治める所は趙という。日や月の光が失われるのは、禍乱の兆しのことである。このことは秦と趙、それぞれの統治下にある民衆が、姚泓と石勒に侵略され、反乱に遭遇することをいうのである。また、劉聡と石勒は幽州と并州の二州を破り、占拠するさまは虎や狼のように、残酷非道であった、と。

『音決』に、「蝕」は、音は食である、と。

李周翰はいう、秦は姚泓の占拠した所、趙は石勒の占拠した所、幽州は段匹磾の占拠した所、并州は劉琨の治める所である。「値」もまた「逢」と同義である。「薄蝕」は、乱賊の晋を侵すことに喩え、「虎(武) 扱」は、武力が盛んであったさまに喩えている、と。

陸善経はいう、秦・趙・幽州・并州は最終的には並びに劉聡と石勒が攻めおとすこととなる。つまり、薄食・武扱は、晋朝が侵略されることをいうのである、と。

〔注〕

①薄蝕 「薄蝕」とは、月が地球と太陽の間に入ることにより太陽の光が遮られることである。「薄食」と同義。

『漢書』卷二十六・天文志に「彗孛飛流、日月薄食」とあ

る。「彗孛」(ほうき星の名)の出現は、戦乱などの災禍の予兆とされる。その顔師古注には、「孟康曰、日月無光曰薄……或曰、不交而食曰薄(孟康曰く、日月の光無きこと薄と曰う……或は曰く、交らずして食するを薄と曰う、と)」とある。

②逢 李周翰注は、「値」を「逢」であるという。ここでの「逢」とは、わざわざいに遭遇する意であろう。『詩経』王風・兔爰に「我生之初、尚無為、我生之後、逢此百罹(我が生の初め、為すこと無からんと尚いしも、我が生の後、此の百罹に逢う)」とある。

③虎扱 「虎扱」は、『三国志』卷二十三・常林伝に「今主上幼冲、賊臣虎扱、華夏震慄、雄才奮用之秋也(今主上 幼冲にして、賊臣虎扱すれば、華夏 震慄して、雄才奮用の秋なり)」とある。虎の獍猛な性格を賊に見立てているのであろう。

④京房易飛候曰：京房の『易飛候』に「凡日食皆於晦朔食者、名曰薄」とある。京房とは、漢の易学者のこと。『隋書』卷三十四・経籍志(子・五行)に「周易飛候 九卷 京房撰」「周易飛候 六卷 京房撰」とある。しかし、この九卷本と六卷本は、別本という説もある。また、書名に「易飛候」を含み収録するものには、『說郛』易五(宛委山堂本、『易飛候一卷』)・『說郛』卷二(商務印本、『易飛候』)、その他『漢魏遺書鈔』経翼第一册(『易飛候』、漢・京房撰、清・王謨輯)や「木犀軒叢書」所收『京氏易』卷二(『易飛候』、漢・京房撰、清・王保訓輯)などがあ

る。

⑤ 戦国策：『戦国策』楚策一に「楚王大怒、輿師襲秦、戦於藍田、又卻。此所謂兩虎相搏者也」とあり、集注本は「又卻」の二字を欠く。『史記』卷七十・張儀伝にも同様の文章がある。なお、この箇所の李善注では、「蘇秦説楚威王」と、蘇秦が楚の威王に説いたことになっているが、実際は張儀が威王に説いた言である。蘇秦と張儀はともに鬼谷先生に学び、蘇秦は合従策を、張儀は連衡策を主張した。

⑥ 兩虎 「兩虎」は、二つの大国や雄人のことに喩えられる。『史記』卷八十一・廉頗藺相如伝に「夫以秦王之威、而相朝廷叱之、辱其群臣。相如雖驚、独畏廉將軍哉。顧吾念之、疆秦之所以不敢加兵於趙者、徒以吾兩人在也。今兩虎共闘、其勢不俱生。吾所以為此者、以先國家之急而後私讐也（夫れ秦王の威を以て、而して相如、之を廷叱し、其の群臣を辱めたり。相如、驚なりと雖も、独り廉將軍を畏れんや。顧みて吾、之を念うに、疆秦の敢て兵を趙に加える所以の者は、徒だに吾兩人の在るを以てするなり。今兩虎共に闘はば、其の勢い俱には生きず。吾の此を為す所以の者、國家の急を先にして私讐を後にするを以てするなり）」と、藺相如のことがある。ここでいう「兩虎」とは、廉將軍（廉頗）と藺相如のこと。秦が二人のいる趙を攻めてこないのは、大きな勢力をもつ兩人を恐れているためであろう。

⑦ 姚泓 姚泓（三八八・四一七）は、後秦の人。字は元

子、姚興の長子。興の後を継いだが、後秦の国勢も衰弱の途にあつた。そののち宋の劉裕に洛陽・長安を侵略され降伏するも、建康にて殺害された。『魏書』卷十、『晋書』卷百十九に伝がある。

⑧ 武 集注本の李周翰注のみ、「虎捩」を「武捩」に作る。唐の高祖の祖（廟号太祖追尊景帝）は、「李虎」が名であつたため、当時の避忌字とされていた。そのため、ここでは「武」を「虎」字の代字として用いている。

05 06 【伊余荷寵靈 感激殉馳騫】

李善曰、左氏伝、遠啓壻曰、寵靈楚国。劉琨詩曰、劉生何感激。解嘲曰、世乱則聖哲馳騫、而不足。

鈔曰、寵、愛也。殉、營也。言我蒙天子神德、愛養我甚厚、故感動激發我心、當此軍戒趨走之術。意在軍機急也。

音決、荷、何可反。殉、辞俊反。呂延濟曰、言我蒙天子神靈寵愛、故感動激發、脩此驅馳於軍戎也。

李善曰く、左氏伝に、遠啓壻いけいぎょう曰く、楚国を寵靈すと。劉琨の詩に曰く、劉生 何にか感激すと。解嘲に曰く、世乱るれば則ち聖哲 馳騫すれども、足らずと。鈔に曰く、寵は、愛なり。殉は、營なり。言は我 天子の神徳を蒙り、我を愛養すること甚だ厚し、故に我が心を

感動し激発せしむ、此の軍戎 趨走の術を営むたまむ。意は軍機の急なるに在り、と。

音決に、荷は、何可の反。殉は、辞俊の反なり、と。

呂延濟曰く、言は我が天子の神靈なる寵愛を蒙るがなり、故に感動し激発して、此の軍戎に駆駟するを脩とほむるなり、と。

〔校勘〕

○李善曰 該当箇所無し（尤刻本・胡刻本・国子監本）、

「善曰」（明州本・秀州本・建州本）

○左氏伝 「左氏伝曰」（尤刻本・胡刻本・国子監本・明州本・秀州本・建州本）

○遼啓疆 「遼啓疆」（尤刻本・胡刻本・国子監本・明州本・秀州本）

○劉生何感激 「鄧生何感激」（尤刻本・胡刻本・国子監本・明州本・秀州本・建州本）

※集注本以外の尤刻本・胡刻本・国子監本・陳八郎本・明州本・秀州本・建州本には、李善注の冒頭に見える「劉琨勸進表曰、荷寵三世（劉琨の勸進表に曰く、寵は三世に荷う、と）」の一文がなく、「左氏伝曰」の「曰」字を欠く。

また、集注本は「劉生」に作るが、「鄧生」の書き損じであらう。

○呂延濟曰 「濟曰」（陳八郎本・明州本・秀州本・建州本）

○脩此驅馳於軍戎也 「循此馳驅於軍戎」（「也」字を

欠く）（陳八郎本・明州本・秀州本・建州本）

〔訳〕

李善はいう、『左氏伝』にいう、遼啓疆はいう、「（靈王は）楚国をいつくしんで大切にされた」と。劉琨の「重贈廬諶一首」詩にいう、「漢の鄧禹は何に心を強く動かされたのだろうか」と。「解嘲」にいう、「世がみだれてしまふと賢者は身を粉にして走りまわつても、たらない」と、と。

『鈔』に曰く、「寵」は、恩恵をほどこすことである。

「殉」は、軍事をおさめることである。わたくしが天子のすばらしい威徳を受け、わたくしを大切に養つてくださることといえば非常に真心の厚いものであった。そのためわたくしの心を動かし奮い立たせられた。軍隊において（天子のために）奔走する術を取りまとめた。わたくしの志は軍事が差し迫ったときにあるのである、と。

『音決』に、「荷」は、何可の反、「殉」は、辞俊の反である、と。

呂延濟はいう、我が天子のこの上なく有り難い寵愛を受けた。そのため心を強く動かされ、軍事に奔走することを取りまとめたのである、と。

〔注〕

①殉 陳八郎本・明州本・秀州本・建州本は、「殉」を「徇」字に作る。曹植の「求自試表」（『文選』卷三十七）

に「古忠臣・義士、出一朝之命、以殉国家之難（古の忠臣・義士、一朝の命を出だし、以て国家の難に殉う）」とあり、「以殉国家之難」の割注には、「五臣作以殉」と見える。またその呂向注には、「一朝不久也。以身従国曰殉。言觀史書、見古忠義之士、皆持不久之命、以殉国家之急也（一朝は久しからざるなり。身を以て国に従うこと殉と曰う。言は史書を觀て、古の忠義の士を見れば、皆な不久の命を持ち、以て国家の急に殉うなり）」とあり、「殉」字に作る。しかし、「殉」「徇」両字のどちらにせよ、国家のために身を献げる覚悟で「したがつう」という意があるのだろう。

②劉琨勸進表曰：校勘でも先述したが、集注本の李善注には、劉琨の「勸進表」についての記載が見られない。諸本にある「勸進表」の引用箇所「荷籠三世（籠は三世に荷う）」は、「荷籠」の用例として用いられている。「三世」とは、劉琨の祖父である邁、父の蕃、そして劉琨のこと。

③左氏伝：『春秋左伝』昭公七年において、遠啓疆の言に「寵靈楚国、以信蜀之役、致君之嘉惠、是寡君既受賜矣、何蜀之敢望（楚国を寵靈して、以て蜀の役を信にし、君の嘉恵を致さば、是れ寡君既に賜を受くるなり、何ぞ蜀を之れ敢えて望まん）」とある。遠啓疆は、春秋・楚の人。周二十三代目の靈王につかえ、太宰となった。

④劉琨詩曰：「重贈盧諶一首」（『文選』卷二十五）に「鄧生何感激、千里來相求（鄧生 何にか感激す、千里來りて相い求めたり）」とある。鄧生は、漢代の鄧禹のこと。

と。引用箇所の李善注引『東觀漢書記』（『東觀漢紀』のこと）には、「鄧禹、字仲華、南陽人也。更始 既至洛陽、以世祖為大司馬、使安集河北。禹 聞之、自南陽發、北徑渡河、追至鄴、謁上。見之甚驩（鄧禹、字 仲華、南陽の人なり。更始は既に洛陽に至り、世祖を以て大司馬と為し、河北を安集せしむ。禹 之を聞きて、南陽より發して、北のかた徑て河を渡り、追いて鄴に至り、上に謁す。之を見れば甚だ驩ぶ）」とある。世祖とは、光武帝のちの劉秀のことである。なお、鄧禹については、『後漢書』卷四十六に伝がある。

⑤解嘲曰：「解嘲」は文章の篇名、揚雄（子雲）の作である。『文選』卷四十五に「当其有事也、非蕭・曹・子房・平・勃・樊・霍、則不能安。当其無事也、章句之徒、相与坐而守之、亦無所患。故世乱則聖哲驅騖、而不足。世治則庸夫高枕、而有余（其の事有るに当たりては、蕭・曹・子房・平・勃・樊・霍に非ざれば、則ち安んずるに能わず。其の事無きに当たりては、章句の徒、相い与に坐して之を守るも、亦た患うる所無し。故に世乱るれば則ち聖哲驅騖すれども、余り有り）」とある。その張銑注には、「聖哲不能独濟、故云不足。驅騖謂奔走也（聖哲 独り濟るを能わず、故に足らずと云う。驅騖は奔走するを謂うなり）」と見える。なお、正文に見える「蕭・曹・子房・平・勃・樊・霍」とは、それぞれ蕭何・曹參・張子房・陳平・周勃・樊噲・霍光のことである。

⑥ 營 『詩經』小雅・黍苗に「肅肅謝功、召伯營之。烈烈征師、召伯成之（肅肅たる謝の功、召伯 之を営む。烈烈たる征師、召伯 之を成す）」とある。その毛伝は「謝、邑也」とし、鄭箋には「肅肅嚴正之貌。營、治也。烈烈威武貌。征、行也。美召伯治謝邑、則使之嚴正、將師旅行、則有威武也（肅肅は嚴正の貌なり。營は、治なり。烈烈は威武の貌なり。征は、行なり。召伯の謝邑を治むれば、則ち之をして嚴正ならしめ、師 旅を將いて行けば、則ち威武有るを美すなり）」とある。

⑦ 趨走 「趨走」とは、職務に奔走することをいう。古くは、『列子』周穆王に「昔昔夢為人僕、趨走作役、無不為也（昔昔 夢みて人僕と為り、趨走作役、為さざる無し）」とある。また、『吳越春秋』卷四・勾踐入臣外伝に「蒙大王鴻恩、得君臣相保。願得入備掃除、出給趨走。臣之願也（大王の鴻恩を蒙り、君臣 相い保つを得。願くは入りては掃除に備うるを得て、趨走するに出給されん。臣の願いなり）」とある。

⑧ 驅馳 陳八郎本・明州本・秀州本・建州本は「馳驅」に作るが、集注本の「驅馳」と同義である。『三国志』卷三十五・諸葛亮伝には、「三顧臣於草廬之中、諮臣以当世之事、由是感激、遂許先帝以驅馳（三たび臣を草廬の中に顧て、臣に諮るに当世の事を以てす、是に由りて感激し、遂に先帝を許し以て驅馳す）」とある。つまり「驅馳」は、他者のためにいそがしく奔走することをいうのである。

07 08 【雖無六奇術 冀与張韓遇】

李善曰、漢書曰、陳平自初從、至天下定後、常以護軍中尉從擊臧荼・陳豨。凡六出奇計、輒益邑封。奇計或頗秘。世莫得聞也。張々良、韓々信。

鈔曰、張良字子房、韓人。容貌雌弱有類婦人、為漢高祖足策。韓信淮陰人。為大將軍、為漢高祖定天下也。

劉良曰、張良曰、張良・韓信有言。我雖無此六奇之術、冀同此々三度遇漢高也。

※集注本の劉良注は、他の版本と比較して文字に多くの異同が見られ、意味が取りづらい。そこで、ここでは原文のみ併記し、明州本の原文を次に記載する。以下、訓読・訳についても明州本に拠る。

「拋明州本」（劉）良曰、陳平有六奇之策。張、張良、韓、韓信。言我雖無此六奇之術、冀同三賢遇漢高也。

陸善経曰、張良・韓信、皆善兵謀也。

李善曰く、漢書に曰く、陳平 初め従いしより、天下の定むるの後に至るまで、常に護軍中尉を以て従いて臧荼・陳豨を撃つ。凡て六たびの奇計を出だせば、輒ち邑封を益す。奇計 或は頗る秘されん。世に聞くを得るもの莫し、と。張は、張良なり、韓は、韓信なり、と。

鈔に曰く、張良 字は子房、韓の人なり。容貌 雌弱にして婦人に類する有れども、漢の高祖の為に策を尽くす。韓信 淮陰の人なり。大將軍と為り、漢の高祖の為に天下

を定むるなり、と。

〔掇明州本〕（劉）良曰く、陳平 六奇の策有り。張は、張良なり、韓は、韓信なり。言は我 此の六奇の術無しと雖も、冀くは三賢の漢高に遇せらるるに同じからんことを、と。

陸善経曰く、張良・韓信は、皆な兵謀を善くするなり、と。

〔校勘〕

○李善曰 該当箇所無し（尤刻本・胡刻本・国子監本）、  
「善曰」（明州本・秀州本・建州本）

○張々良、韓々信 「張々良、韓々信也」（尤刻本・胡刻本・国子監本・秀州本）、該当箇所無し（建州本）

○劉良曰 「良曰」（陳八郎本・明州本・秀州本・建州本）

○張良曰、張良・韓信有言 該当箇所無し（陳八郎本・明州本・秀州本・建州本）

※集注本には、陳八郎本・明州本・秀州本・建州本の劉良注にある「陳平有六奇之策。張張良、韓韓信」が見られない。

○言我雖無此六奇之術 「言我雖無此六奇之術」（陳八郎本）

○冀同此々三度遇漢高也 「冀同 三賢遇漢高也」（「此々」の二字を欠き、「三度」を「三賢」に作る）（陳八郎本・明州本・秀州本・建州本）

〔訳〕

李善はいう、『漢書』にいう、「陳平がはじめて高祖に仕えてから、天下を治めるまで、つねに護軍中尉として高祖の軍につかえて臧荼・陳豨を攻撃した。（その間）合わせて六たび奇謀を出すと、そのたびに都の領地を増封された。その奇謀はいつも極秘にされたのであろう。（そのため）世間では、この奇謀のことを聞いたことがなかったのである」と。「張」は、張良のことである、「韓」は、韓信のことである、と。

『鈔』にいう、張良は字は子房、韓の人である。容貌は弱々しく女性に似ているけれども、漢の高祖のために策略をめぐらせた。韓信は淮陰の人である。大將軍となり、漢の高祖のために天下を治めたのである。

〔掇明州本〕（劉）良はいう、陳平には六たび参画された奇計があった。張は、張良のことであり、韓は、韓信のことである。わたくしには（陳平のような）六つの奇計はないけれども、願うことには（張良・韓信・蕭何ら）三人の賢者が漢の高祖から厚遇を得たように、自分もそうありたいものだといふのである、と。

陸善経はいう、張良・韓信は、どちらも軍事の策略に長けていたのである、と。

〔注〕

①漢書曰：『漢書』卷四十・陳平伝に「（陳）平自初

從、至天下定後、常以護軍中尉從擊臧荼・陳豨・黥布。凡六出奇計、輒益邑封。奇計或頗秘。世莫得聞也（陳）平初め從いしより、天下の定むる後に至るまで、常に護軍中尉を以て從いて臧荼・陳豨・黥布を撃つ。凡て六たび奇計を出だせば、輒ち邑封を益す。奇計 或は頗る秘されん。世に聞くを得るもの莫し」とある。集注本の李善注は、「臧荼」・「陳豨」二人の名をあげているが、『漢書』陳平伝には兩人に加えて「黥布」の名が見える。一方、『史記』卷五十六・陳丞相世家には、「陳豨」「黥布」二名のみで「臧荼」の名は見られない。

② 陳平 陳平（？・前一七八）は、漢代、陽武の人。はじめは魏王の咎や項羽についていたが、項羽の誅殺をおそれ、のちに漢へ投降して都尉となった。さらに彼が護軍中尉であったとき、漢の高祖に「智有余」（『史記』卷八・高祖本紀）と言わしめたその謀計を駆使して、陳平は漢の高祖を創業に及ばせ、天下をおさめさせたのである。『史記』陳丞相世家には「傾側擾攘楚・魏之間、卒歸高帝。常出奇計、救紛糾之難、振國家之患（楚・魏の間に傾側擾攘し、卒に高帝に歸す。常に奇計を出だし、紛糾の難を救い、國家の患を振う）」と見える。また、『漢書』陳平伝に「卒歸於漢而為謀臣」とある。

③ 六奇計 「奇計」は、集注本の李善注に「奇計或頗秘、世莫得聞也」とあるように、陳平の謀計は極秘とされていたため、その詳細はよくわからないとされている。しかし、清・錢大昭の『漢書弁疑』に、「間疏楚君臣、一奇計也。」

夜出女子二千人榮陽東門、二奇計也。躡漢王立信為齊王、三奇計也。偽遊雲夢縛信、四奇計也。解平城圍、五奇計也。其六當在從擊臧荼・陳豨・黥布時。史伝無文（楚の君臣を間疏せしむるは、一の奇計なり。夜に女子二千人を榮陽の東門より出だすは、二の奇計なり。漢王を躡み信を立て齊王に為さずするは、三の奇計なり。偽りて雲夢に遊び信を縛するは、四の奇計なり。平城の圍みを解くは、五の奇計なり。其の六は當に從いて臧荼・陳豨・黥布を撃つ時に在るべけん。史伝に文無し）」とある。『史記會注考証』は、この箇所の注に『漢書弁疑』の錢大昭説を記載するも疑わしいという。

④ 張良 張良（？・前一六八）は、韓信・蕭何とならんで、漢の創業に立ちあつた功臣である。韓の世族であつたが韓は秦に滅ぼされ、その仇を討とうと始皇帝を襲撃するも果たせず、名を変えて下邳にかくれていた。その際、黄石公から兵法を学んだ。のちの秦末の反乱の際には韓王成の司徒となり、漢の元年（前二〇六）に漢の高祖の漢中に入り、高祖のよき参謀者として漢王朝統一に名を馳せた。『漢書』卷四十に伝がある。

⑤ 韓信 韓信（？・前一九六）は、張良と同様に、漢創業の功臣である。秦末の混乱期には項梁や項羽についていたが、重用されなかつたため漢軍に從つた。のちに蕭何の推薦によつて大將軍に任ぜられた。また、韓信は軍略に長けていた。なお、『漢書』卷三十一にも伝がある。

⑥ 三賢 集注本のみ「三度」に作り、その他、尤刻本・

胡刻本・国子監本・陳八郎本・明州本・秀州本・建州本はみな、「三賢」に作る。三史の正文において、「三賢」の語は見つかからない。しかし、『史記』卷八・高祖本紀において高祖は、「夫運籌策、帷帳之中、決勝於千里之外、吾不如子房。鎮国家、撫百姓、給餽饗、不絶糧道、吾不如蕭何。連百万之軍、戰必勝、攻必取、吾不如韓信。此三人皆人傑也（夫れ籌策を運らし、帷帳の中に、千里の外に勝に決するは、吾 子房に如かず。国家を鎮め、百姓を撫し、餽饗を給して、糧道を絶たざるは、吾 蕭何に如かず。百万の軍を連ね、戦えば必ず勝ち、攻むれば必ず取るは、吾 韓信に如かず。此の三人皆な人傑なり）」という。このため、ここでいう三者の「人傑」とは、張良・蕭何・韓信のことであり、劉良のいう「三賢」のことをいうのだろう。

09 10 【寧戚扣角歌 桓公遇乃拳】

李善曰、淮南子曰、寧戚擊牛角而歌。桓公拳、以淮南子曰、為大田。高誘曰、田官也。

鈔曰、中牟人 商旅於齊。桓公出遊夜反、戚乃扣牛角而歌々曰、南山峨峨、白石粲。下有寒泉、文章優。中有鯉魚、長尺半。短布单衣裁至骭。生不遭堯与舜禪。長夜漫漫、何時且。黃特上坂、且休息、細剉大豆。在爾側、吾将与爾扣濟国。桓公聞、乃拳而任之執火夜封之。

音決、寧、那定反。扣、音口。拳、協韻、音掬。

李善曰く、淮南子に曰く、寧戚 牛角を撃ちて歌う、と。桓公 拳ぐ。以て大田と為る、と。高誘曰く、田は官なり、と。「ここでは、見消に従って訓読した」

鈔に曰く、中牟の人 齊に商旅せり。桓公 遊に出でて夜 反れば、戚乃ち牛の角を扣きて歌う。歌に曰く、南山は峨峨として、白石は粲たり。下に寒泉有り、文章 優として、中に鯉魚有り、長さ尺半なり。短布の单衣 裁つるれば骭に至る。生まれて堯と舜との禪りに遭わず。長夜漫漫として、何れの時か且けん。黃特は坂を上りて且く休息し、大豆を細剉す。爾の側に在り、吾 将に爾と濟国を扣かんとす、と。桓公 聞けば、乃ち拳げて之を任じ、火を執りて夜 之を封ず、と。

音決に、寧は、那定の反なり、扣、音は口。拳は、協韻、音は掬、と。

〔校勘〕

○李善曰 該当箇所無し（尤刻本・胡刻本・国子監本）、  
「善曰」（明州本・秀州本・建州本）

○以 該当箇所無し（尤刻本・胡刻本）

○淮南子曰 該当箇所無し（尤刻本・胡刻本・国子監本・明州本・秀州本・建州本）

※集注本のみに見られる「淮南子」には、見消が付けられている。「曰」字には付いていないが、同様のことである。

○田官也 「大田官也」(尤刻本・胡刻本・国子監本・明州本・秀州本・建州本)

※集注本には、呂向注が見られない。陳八郎本・明州本・秀州本・建州本は、次のように作る。

「向日、寧戚扣角歌商声於齊門。桓公遇而拏之、以為田官(向日く、寧戚 角を扣きて商声を齊門に歌う。桓公 遇して之を拏げ、以て田官と為す)」

「訳」

李善はいう、『淮南子』にいう、「寧戚は牛の角をたたいて歌う」と。(それで) 桓公は(寧戚を) 重用した。(寧戚は) 大田となった。高誘はいう「田とは農官のことである」と、と。

『鈔』にいう、中牟の人は齊に商いをしながら旅をしていた。桓公が外出し、夜になって帰ってくると、寧戚は牛の角をたたいて歌った。その歌にいう「南山は非常に険しく、白石は美しい。下には寒泉があつて、水面の波紋は揺らめいている。その泉の中には鯉魚がおり、長さは一尺半ある。下僕の粗末な衣を裁断してみると脛まで至る。春秋戦国の時代に生まれて堯と舜の禪讓にはめぐりあわなかつた。夜は長くつづくが、いつになれば明けるのであるうか。子牛は坂をのぼり、しばらくの間休み、草を食んでいる。あなた様のお側にはべり、わたくしはすぐにもあなた様とともに済国を助けようとしているのです」と。桓公は(寧戚の歌を) 聞き、そこで重用して寧戚を任命し、松明に火

をつけ夜になつてから寧戚に位を与えた、と。

『音決』にいう、「寧」は、那定の反である。「扣」の音は口である。「拏」は、協韻、音は抛である、と。

「注」

① 淮南子曰：『淮南子』道応に「寧戚欲干齊桓公、困窮無以自達、於是為商旅、將任車以商於齊。暮宿於郭門之外、桓公郊迎客、夜開門辟任車。爝火甚盛、從者甚衆。寧戚飯牛車下、望見桓公而悲、擊牛角而疾商歌。桓公聞之、撫其僕之手曰、異哉、歌者非常人也。命後車載之(寧越 齊の桓公に干めんと欲すれども、困窮して以て自ら達すること無し、是に於いて商旅と為り、任車を拏きて以て齊に商う。暮に郭門の外に宿すれば、桓公 郊に客を迎えんとして、夜に門を開き任車を辟く。爝火 甚だ盛んになりて、從者 甚だ衆し。寧戚 牛を車下に飯い、桓公を望み見て 悲しみ、牛角を撃ち疾として商歌す。桓公 之を聞きて、其の僕の手を撫して曰く、異なるかな、歌者 常人に非ざるなり、と、後車に命じて之を載す、と)」とある。原本は、「寧戚」を「寧越」に作るが、李善注引『淮南子』は「寧戚」とし、併せて引用されることの多い『呂氏春秋』についても「寧戚」に作る。なお、この逸話は「寧戚扣角」と『蒙求』の標題にもなっており、のちに貧しい者が求職することをいう故事となった。

② 桓公拏：『淮南子』道応に「当是拏也。桓公得之矣(是の拏に当たりてや。桓公 之を得)」とある。一方、

李善注に見える「為大田」の箇所は見られず、また「田」（尤刻本・胡刻本・国子監本・明州本・秀州本・建州本はみな、「大田」に作る）についての高誘注も見られない。「田」とは、農業をつかさどる官名のことである。なお、『呂氏春秋』問下に「桓公聞寧戚歌、挙以為大田（桓公寧戚の歌を聞きて、挙げ以て大田と為る）」とある。

桓公（？、前六四三）は、春秋初期の齊の君主である。姓名は姜小白。鮑叔牙の進言をうけて管仲を任用し、富国強兵を策した。のちに楚をくだして春秋最初の霸王となった。春秋の五霸の一人である。『史記』卷三十二・齊太公世家に詳しい。

③ 中牟人 『漢書』卷三十・芸文志に「寧越一篇」とあり、その顔師古注に「中牟人為周威王師（中牟の人 周の威王の師と為る）」とある。つまり、ここでの「中牟人」とは、寧戚のことである。なお、寧戚は、春秋・衛の人。

④ 歌曰： 寧戚の歌は、『楚辭』離騷（『文選』卷三十二）に「寧戚之謳歌兮、齊桓聞以該輔（寧戚の謳歌、齊の桓 聞きて以て該えて輔く）」とある。その他、寧戚の歌が収められるものには、『漢書』卷五十一・鄒陽伝の応劭注・『樂府詩集』卷八十三・雜歌謡辭一（「商歌二首」）・『芸文類聚』卷四十三・樂部三 歌（「齊甯戚扣牛角歌」）などがある。しかし、文字の異同が甚だしく、歌の題名も異なっている。

『古詩紀』卷一は、「飯牛歌」と題し、その題下注に「蝟笑外稿云、此歌不類春秋時人語。蓋後世所擬者。高誘註呂

氏春秋謂戚所歌乃詩碩鼠之辭、雖未見所拋亦可驗。南山白石之歌、誘初未之見也。然其辭亦激烈足以動人」とあり、三章からなる。この三章は、集注本の引用箇所とほぼ同様の文章ではあるが、まとまった章からの引用ではなく、三章からそれぞれ、句が引き抜かれている。以下、『古詩紀』飯牛歌を記載する。

「南山矸、白石爛。生不逢堯与舜禪。短布单、衣適至𦔃。從昏飯牛薄夜半、長夜漫漫、何時旦」

「滄浪之水、白石粲。中有鯉魚、長尺半。弊布单衣、裁至𦔃。清朝飯牛至夜半、黄牛上坂、且休息。吾将捨汝相齊国」  
「出東門兮、万石斑、上有松柏、青且闌、麤布衣兮、縑樓時不遇兮、堯舜主牛兮。努力食細草。大臣在爾、側吾当与爾適楚国」

11 12

【荀息冒險難 實以忠貞故】

李善曰、左氏伝曰、初獻公使荀息傅奚齊。公疾、召之曰、其若之何。稽首而对曰、臣竭其股肱之力、加之以忠貞。其濟、君之靈也、不濟、則以死繼之。公曰、何謂忠貞。对曰、公家之利、知無不為、忠也、送往事居、偶俱無猜、貞也。鈔曰、左伝晋献公使荀息傅奚齊。及李克殺奚齊于次、荀息立卓子、又被克所殺、息乃死也。

音決、冒、亡北反。

張銑曰、晋献公使荀息傅太子奚齊。荀息曰、臣竭其股肱、

加以忠貞。不濟、則以死繼之。此是冒触險難也。難也。

李善曰く、左氏伝に曰く、初め獻公 荀息をして奚齊に傳たらしむ。公 疾む、之を召して曰く、其れ之を若何せん、と。稽首して對えて曰く、臣 其の股肱の力を竭くし、加之<sup>かみのみ</sup> 忠貞を以てせん。其れ濟らば、君の靈なり、濟さざれば、則ち死を以て之を繼がん、と。公曰く、何をか忠貞と謂う、と。對えて曰く、公家の利、知りて為さざる無きは、忠なり。往を送りて居に事え、偶つながら俱に猜い無きは、貞なり、と。

鈔に曰く、左伝に晋の獻公 荀息をして奚齊に傳たらしむ。荀息 李克の奚齊を次に殺すに及び、荀息 卓子を立て、又た克の殺す所と被り、息 乃ち死するなり、と。

音決に、冒は、亡北の反なり、と。

張銑曰く、晋の獻公 荀息をして太子の奚齊に傳たらしむ、と。荀息曰く、臣 其の股肱を竭くし、加うるに忠貞を以てす、濟さざれば、則ち死を以て之を繼がん、と。此れは是れ險難に冒触するなり、と。

〔校勘〕

○李善曰 該当箇所無し（尤刻本・胡刻本・国子監本）、  
「善曰」（明州本・秀州本・建州本）

○偶俱無猜 「耦俱無猜」（尤刻本・胡刻本・明州本・建州本）

○張銑曰 「銑曰」（陳八郎本・明州本・秀州本・建州本）

本）

○晋獻公使荀息傳太子奚齊 「晋獻公使荀息傳」 奚齊

（陳八郎本）（「太子」を欠く）、該当箇所無し（建州本）

○臣竭其股肱、加以忠貞 「臣請竭其股肱之力、加之以

忠貞」（「請」字を挿入。「之」「力」の二字を挿入。「之」

字を挿入）（陳八郎本・明州本・秀州本）、該当箇所無し

（建州本）

※建州本のみ『左氏伝』の引用が見られない。

○此是冒触險難也 「此是冒触險難」（「也」字を欠く）

（陳八郎本・明州本・秀州本・建州本）

※集注本は、「難也」を二度重ね見消がつけられている。

衍字であろう。字数を調整するためにこのようにしたのではないか。

〔訳〕

李善はいう、『左氏伝』にいう、「はじめ獻公は荀息に（まだ幼い）奚齊の世話役をさせた。（しかし）公が病になると、荀息を呼んで（心配して）いう、幼い奚齊をどうしようというのか、と。（荀息は）恐縮し頭を地につけ拝礼し答えていう、わたくしめが手足の力をつくし、さらに忠と貞の心をもってお仕えいたしましょう。事がうまく成功すれば、君のありがたきお陰であります、事がうまく成功しなければ、我が一命を捨て君の志を継ぎましょう、と。（そこで）公はいう、忠と貞とはどのようなことなのか、と。（荀息が）答えていう、公室のためであると知れば、

どのようなことでも行うのが、忠であり、崩御された君を大切に送って、そののちに継ぐ君に仕え、両者ともから疑われないようにするのが、貞であります」と、と。

『鈔』にいう、『左氏伝』に晋の献公は荀息に奚齊の世話役をさせた。(献公の死後)荀息は里克が奚齊を靈安室で殺されたので、荀息は卓子を立てたが、また里克に殺されたことを受けて、荀息は殉死したのである、と。

『音決』に、「冒」は、正北の反である、と。

張銑はいう、晋の献公は荀息に太子である(幼い)奚齊の世話役をさせた。荀息はいう「わたくしめはこの手足の力を存分に使って、さらには忠と貞の心をもってお仕えいたします、(それが)うまく成功いたしませんでしたら、己の命を捨てて君の志を継ぎましょう」と。これが(荀息が)困難をおかすということをいうのである、と。

〔注〕

①左氏伝曰：『左氏伝』僖公九年に「初、献公使荀息傅奚齊。公疾、召之曰、以是藐諸孤、辱在大夫、其若之何。稽首而对曰、臣竭其股肱之力、加之以忠貞。其濟、君之靈也、不濟、則以死繼之。公曰、何謂忠貞。对曰、公家之利、知無不為、忠也、送往事居、耦俱無猜、貞也」とある。集注本の李善注には、「以是藐諸孤、辱在大夫(是の藐たる諸孤を以て、大夫に在るを、辱くす)」というまだ幼い奚齊を心配し、荀息を気にかける献公の言を欠く。「藐諸孤」は、「藐」が幼少の、「諸孤」が孤児の意。献公は自

分が崩御したのちに孤児となる奚齊のことを、あえて存命のうちから「孤」と呼んだのであろう。なお、献公は、僖公九年九月に崩御している。

②稽首 「稽首」とは、頓首とともに最も重んじられる礼の作法のことである。『周礼』春官・大祝に「弁九擗、一曰稽首、二曰頓首(九擗を弁ずれば、一に稽首と曰い、二に頓首と曰う)」とあり、その鄭玄注に「稽首拜、頭至地也、頓首拜、頭叩地也(稽首の拜、頭地に至るなり、頓首の拜、頭地に叩くなり)」とある。また賈公彦疏には「稽首、拜中最重。臣拜君之拜(稽首は、拜中にて最も重し、臣の君に拜すの拜なり)」と見える。

③送往事居 注①に見える「送往事居」の杜預注には、「往、死者。居、生者。耦、兩也。送死事生、兩無猜恨、所謂正也(往は、死者なり。居は、生者なり。耦は、兩つなり。死を送り生に事う、兩つながら猜恨する無し、所謂正なり)」とある。ここでは、「往」は崩御した献公をさし、「居」は庶子の奚齊のことをさす。

④左伝：『左氏伝』僖公九年に「冬、十月、里克殺奚齊于次。書曰殺其君之子、未葬也。荀息將死之、人曰、不如立卓子、而輔之。荀息立公子卓、以葬。十一月、里克殺公子卓于朝、荀息死(冬、十月、里克 奚齊を次に殺す。書して其の君の子を殺すと曰うは、未だ葬らざればなり。荀息 將に之に死なんとす、人曰く、卓子を立て、之を輔くるに如かず。荀息 公子卓を立てて、以て葬れり。十一月、里克 公子卓を朝に殺し、荀息死す)」とあり、注①

に引用した『左氏伝』の後文にあたる。同年九月に崩御した献公の跡継ぎに文公（重耳）を立てようと謀叛をおこした大夫の里克らは、奚斉を殺害する策略を荀息に持ちかける。しかし、荀息は献公と交わした約束をまもり、殉死したのである。なお、集注本引『文選鈔』は、「里克」を「李克」に作るが、誤りであろう。

⑤次 『左氏伝』該当箇所の杜預注に、「次、喪寢（次とは、喪寢なり）」とあり、『史記』卷三十九・晋世家には、「里克殺奚斉于喪次、献公未葬也」とある。「喪次」とは、喪屋のこと。奚斉は、死者（献公）の遺体が一時安置されている場所で、殺害されたのである。

⑥險難 『楚辞』九歌・山鬼（『文選』卷三十三）に「路險難兮、独後來（路 險難にして、独り後れ来る）」とあり、その李善注引王逸注には、「其路險阻又難、故來晚暮（其の路 險阻にして又た難し、故に來ること 晚暮す）」と見える。また、陸機「君子行」（『文選』卷二十八）に「天道夷且簡、人道險而難（天道 夷らかにして且つ簡なり、人道 險しくして難し）」とあり、その呂向注に「天道無私、故平易。人道多僻、故險難（天道 私無し、故に平易なり。人道 僻多し、故に險難なり）」とある。つまり「險難」とは、もとは道が険しく困難なことをいったが、転じて困難一般をいうようになったのであろう。

李善曰、論語陽虎曰、日月逝矣。盧謚贈崔温詩曰、古人非所希。

鈔曰、言我遇不如寧戚、忠不如荀息。不能晋治、又不能致死。故愧彼二人者也。

李善周翰曰、逝、往也。言我愧無荀・寧之度量也。陸善経曰、古人謂荀・寧・張・韓等。張・韓等。

李善曰く、論語陽虎に曰く、日月逝く、と。盧謚の崔温に贈る詩に曰く、古人 希むる所に非ず、と。

鈔に曰く、言は我が遇 寧戚に如かず、忠 荀息に如かず。治を晋むること能わず、又た死に至ること能わず。故に彼の二人に愧づる者ならん、と。

李善周翰曰く、逝は、往なり。我 荀・寧の度量無きを愧ずるを言うなり、と。

陸善経曰く、古人とは荀・寧・張・韓等を謂う、と。

〔校勘〕

○李善曰 該当箇所無し。（尤刻本・胡刻本・国子監本）、「善曰」（明州本・秀州本・建州本）

○李周翰曰 「翰曰」（陳八郎本・明州本・秀州本・建州本）

※集注本は「李善周翰」としているが、「李周翰」の書き損じであろう。

○言我愧無荀・寧之度量也 「言我愧无荀・寧之度量」

（陳八郎本）、「言我愧無荀・寧之度量」〔明州本・秀州本・建州本〕

※陸善経注は「張・韓等」を二度続けて書いているが、衍字であろう。文字数を合わせるためにこのようにしたのではないか。

〔訳〕

李善はいう、『論語』陽虎にいう、「歲月は過ぎ去つていく」と。盧諶の「崔・温に贈る詩」にいう、「昔の偉人はのぞめそうもない」と。

『鈔』にいう、わたくしが厚遇を受けたことは、寧戚にも及ばず、君主への忠誠は、荀息にも及ばなかった。政治をおこなう手腕も不出来で、死を以て仕えることもままたらなかつた。そのため、この二人に恥じているのだ、と。

李周翰はいう、「逝」は、時がすぎゆくことである。劉琨が荀息や寧戚のような度量が無いことを恥ずかしく思うことをいうのである、と。

陸善経はいう、「古人」とは、荀息・寧戚・張良・韓信らのことをいうのである、と。

〔注〕

① 論語陽虎：『論語』陽貨に「日月逝矣、歳不我与（日月逝く、歳 我に与せず）」とあり、その馬融注には「年老、歲月已往。当急仕（年老いて、歲月は已に往けり。当に仕うるを急ぐべし）」とある。また『文選集注』は、陽

貨を「陽虎」に作る。これに関しては、孔安国の伝に「陽貨、陽虎也。蓋名虎、字貨。為季氏家臣、而專魯国之政。欲見孔子、使仕（「陽貨は、陽虎なり。蓋し 名は虎、字は貨なり。季氏の家臣と為りて、魯国の政を専らにす。孔子に見えて、仕いしめんと欲す）」とあり、同一人物であるというが、別人とする説もある。

② 盧諶贈崔温詩：『文選』卷二十五所收。「崔温」とは、崔悦と温嶠のこと。両者は盧諶とともに劉琨の臣下であり、盧諶の旧友であった。「崔・温に贈る詩」には、「古人非所希、短弱自有素。何以敷斯辞、惟以二子故（古人希う所に非ず、短弱 自ら素有り。何を以てか斯の辞を敷ける、惟れ二子を以ての故なり）」とあり、その劉良注に「古人謂倪寛何武。希、望也。短弱、諶自謂也。有素、謂素有仁厚之性。敷、布也。二子、崔温也。以知我情、故有此辞（古人は倪寛・何武を謂う。希は、望むなり。短弱とは、諶自ら謂うなり。素有りととは、素より仁厚の性有るを謂う。敷は、布なり。二子とは、崔・温なり。以て我が情を知る、故に此の辞有り）」とある。ここでの「古人」とは、「倪寛」「何武」のことをいう。両者は、ともに漢代において民衆に大変慕われた役人である。

③ 逝 『説文解字』に、「往也（往くなり）」とある。『尚書』大誥に「若昔朕其逝、朕言艱日思（昔 朕其れ逝くが若き、朕は艱を言い日に思う）」とあり、その孔穎達疏に「順古道我其往東征矣（古道に順いて我其れ往きて東征す）」とある。

15 16 【飲馬出城豪 北望沙漠路】

李善曰、古有飲馬長城窟行。盧諶贈崔溫詩曰、北眺沙漠垂、南望旧京路。

鈔曰、謂在并州城池中、飲馬、而欲北征匈奴、琨今傷晋乱離、亦欲平定天下、四征不遲也。

音決、飲、於禁反。濠、音豪、漠、音莫。

呂延濟曰、濠、城池。沙漠、北方也。

陸善経曰、時琨為并州刺史。并州北臨沙漠。豪、塹也。

今案諸家本豪為濠。

李善曰く、古に飲馬長城窟行有り。盧諶の崔温に贈るの詩に曰く、北のかた 沙漠の垂を眺め、南のかた 旧京の路を望むと、と。

鈔に曰く、并州の城池の中に在りて、馬に飲い、北のかた凶奴を征たんと欲し、琨 今晋の乱離するを傷み、亦た天下を平定せんと欲し、四に征くこと遅たず、と。

音決に、飲は、於禁の反なり。濠、音は豪、漠、音は莫、と。

呂延濟曰く、濠は、城池なり。沙漠は、北方なり、と。

陸善経曰く、時に琨 并州刺史と為る。并州は北のかた沙漠を臨む。豪は、塹なり。今案ずるに諸家の本 豪を濠と為す、と。

〔校勘〕

○李善曰 該当箇所無し（尤刻本・胡刻本・国子監本）、

「善曰」（明州本・秀州本・建州本）

○呂延濟曰 「濟曰」（陳八郎本・明州本・秀州本・建州本）

※集注本の呂延濟注は、陳八郎本・明州本・秀州本・建州本に見える「言傷晋乱、意欲平定天下」の一文を欠く。しかし、集注本引『文選鈔』に、ほぼ同じ内容の「琨今傷晋乱離、亦欲平定天下、四征不遲也」の一文が見える。

〔訳〕

李善はいう、古い作品に「飲馬長城窟行」がある。盧諶の「崔温に贈る詩」にいう、「北へむかつて沙漠のはてを眺め、南へむかつて荒れ果ててしまった洛陽へつながらる路を見わたす」と。

『鈔』にいう、并州の城堀の池におり、馬に水を飲ませて、北方の凶奴を討伐しようとしている。劉琨は今、晋が戦乱に巻き込まれることを悲しみ、この世を安定させようとして、四方に転戦し、いとまがなかった、と。

『音決』にいう、「飲」は、於禁の反である。「濠」は、音は豪である。「漠」は、音は莫である、と。

呂延濟はいう、「濠」は、城壁をめぐる堀のことである。沙漠は、北の方角である、と。

陸善経はいう、当時劉琨は并州刺史であった。并州は北

方に砂漠が広がっている。「豪」は、城壁の周囲をめぐる堀のことである。今調べるに諸家の本は「豪」（土の盛られた堀）を濠（水のためられた堀）としていたのではないかと。

〔注〕

① 飲馬長城窟行 「飲馬長城窟行」（『文選』卷二十七）

は、樂府の一つである。作者について、李善は不明としているが、『玉台新詠』卷一には、蔡邕の作とある。題下の李善注に「言征戍之客至於長城、而飲其馬、婦思之。故為長城窟行（言は征戍の客 長城に至りて、其の馬に飲う、婦 之を思う。故に長城窟行と為す）」とある。また張銑注には、「長城」について「長城秦所築以備胡者。其下有泉窟、可以飲馬。征人路出於此、而傷悲矣（長城は秦の築き以て胡に備うる所の者なり。其の下に泉窟有り、以て馬に飲うべし。征人 路に此に出でて、傷み悲しむ）」とし、続けて「言天下征役軍戎、未止婦人思夫。故作是行（言は天下の征役軍戎、未だ婦人の夫を思わしむるを止めず。故に是の行を作る）」と注する。つまりこの「飲馬長城窟行」は、遠征中の夫を思慕する妻をうたったものである。

② 盧謚贈崔温詩： 引用箇所は「崔・温に贈る詩」の第三句・第四句（全三十四句）にあたり、その李善注には、「説文曰、漠、北方流沙也。曹子建白馬篇曰、揚声沙漠垂（説文に曰く、漠、北方の流沙なり。曹子建の白馬篇に曰く、声 沙漠の垂に揚ぐ）」とある。また劉良注は、「沙

漠、流沙也。垂辺也。旧京、洛陽也。洛陽被燒破、故云旧京（沙漠、流沙なり。垂は辺なり。旧京、洛陽なり。洛陽燒き破らる、故に旧京と云う）」とある。

懐帝の世にあつた永嘉五年（三一）六月、洛陽は飢饉の最中であつた。その衰微を狙い、劉聡の子曜や王弥らが軍を挙げ、洛陽は陥落した。いわゆる永嘉の乱（三一、三一五）のことである。『晋書』卷五・懐帝紀に「百官士庶死者、三万余人（百官士庶の死者、三万余人なり）」とあり、『晋書』卷百二・劉曜伝には「（劉）曜、於是害諸王公及百官已下三万余人、於洛水北、築為京觀（劉）曜、是に於いて諸王公及び百官已下三万余人を害し、洛水の北において、築きて京觀を為る）」とある。

③ 北征 劉琨の「扶風歌」（『文選』卷二十八）に、「朝発広莫門、暮宿丹水山。左手彎繁弱、右手揮龍淵。顧瞻望宮闕、俯仰御飛軒。拋鞍長歎息、淚下如流泉（朝に発す、広莫の門。暮に宿す、丹水の山。左手に繁弱を彎り、右手に龍淵を揮う。顧瞻して宮闕を望み、俯仰して飛軒を御す。鞍に抛りて長く歎息し、涙の下つること流泉の如し）」とあり、「北征」への嘆きを吐露している。

④ 城池 「城池」とは、城壁のまわりをめぐる堀のことである。その堀には戦乱などから城を護衛するために、水がためられていることが多い。『墨子』備城門に「我城池修、守器具、樵粟足、上下相親、又得四隣諸侯之救、此所以持也（我が城池修まり、守器具わり、樵粟足り、上下相親しみ、又た四隣諸侯の救いを得、此れ持する所以な

り」とある。

⑤豪為濠 集注本のみ「豪」に作るが、尤刻本・胡刻本・国子監本・陳八郎本・明州本・秀州本・建州本は、みな「濠」に作る。

17 18

【千里何蕭條 白日隱寒樹】

19 20

【投袂既憤滿 撫枕懷百慮】

李善曰、

左氏伝曰、楚子投袂而起。白虎通曰、天子崩、

哀痛憤滿。劉琨重贈盧諶詩曰、中夜撫枕歎、想与数子遊。

百慮已見苦雨詩。

鈔曰、白日隱寒樹、喻年老也。投袂、攘袂也。懷、傷也。

傷此乱離、故有百慮也。

音決、袂正世反。

劉良曰、蕭條、遠也。投袂、猶奮袂也。憤滿、怨也。撫枕、百慮、言不安臥也。

李善曰く、左氏伝に曰く、楚子 袂を投じて起つ、と。

白虎通に曰く、天子崩じて、哀痛し憤滿す、と。劉琨の重

ねて盧諶に贈る詩に曰く、中夜 枕を撫して歎じ、数子と

遊ばんことを想う、と。百慮は、已に苦雨詩に見ゆ、と。

鈔に曰く、白日 寒樹に隠るとは、年の老うるに喩うる

なり。投袂、袂を攘ぐるなり。懷、傷むなり。此れ乱離す

るを傷む、故に百慮有り、と。

音決に、袂、正世の反なり、と。

劉良曰く、蕭條、遠なり。投袂、猶お袂を奮うなり。憤滿、怨なり。撫枕・百慮、安んじて臥さざるを言うなり、と。

〔校勘〕

○李善曰 該当箇所無し。(尤刻本・胡刻本・国子監本)、「善曰」(明州本・秀州本・建州本)

○哀痛憤滿 「哀痛憤懣」(尤刻本・胡刻本・国子監本・明州本・秀州本・建州本)

○百慮已見苦雨詩 「百慮已見上文」(尤刻本・胡刻本・国子監本・明州本・秀州本)、「該当箇所無し」(建州本)

※「仲長統詩曰、百慮何為、至安在我、延佇」の注は、明州本と建州本に見られる。明州本については、眉批にある。

また建州本は、李善注の最後の一文として記載されている。

○劉良曰 「良曰」(陳八郎本・明州本・秀州本・建州本)

※集注本には、「白日隱寒樹、喻年老也」の一文が見られない。しかし、陳八郎本・明州本・秀州本・建州本には、劉良注の「蕭條遠也」の後に該当箇所が記載される。

○憤滿怨也 「憤懣怨也」(陳八郎本)

※建州本において、李善注は「懣」に作り、劉良注では「滿」に作る。

〔訳〕

李善はいう、『左氏伝』にいう、「楚子は袂をふるって立ち上がった」と。『白虎通』にいう、「天子が崩御されて、その死をいたみかなしみ、どうしようもない悲嘆や煩悶に思い悩む」と。劉琨の「重ねて盧諶に贈る詩」にいう、「かねてから立派な人々と交遊したいと思っていたが、今となつてはかなわない。だから、夜中に枕を撫でながら、やるせない心情になるのである」と。「百慮」は、すでに「苦雨詩」に見える、と。

『鈔』にいう、「輝かしい太陽は零落した木々のあいだに静かに沈んでいく」とは、年老いることに喩えているのである。「投袂」は、袂をふるって奮起することである。「懷」は、悲しみいたむことである。世間の動乱に巻き込まれることを思い悲しむのである、だからこそ「さまざまな思い」があるのである、と。

『音決』に、「袂」は、正世の反である、と。劉良はいう、「蕭條」は、遠くはるかなることである。

「投袂」は、やはり袂をふるい立ち上がることである。「憤満」は、いかりである。「撫枕」・「百慮」は、安心して横になつて眠れないことというのである、と。

〔注〕

①左氏伝曰：『左氏伝』宣公十四年に「楚子聞之、投袂而起。屨及于室皇、劍及于寢門之外、車及於蒲胥之市。秋、九月、楚子困宋（楚子之を聞き、袂を投じて起つ。屨は室皇に及び、劍は寢門の外に及び、車は蒲胥の市に及

ぶ。秋、九月、楚子宋を囲む）」とあり、李善注は傍線箇所「聞之」の二字を欠く。楚子（莊王）は自身が齊に聘門させた使者の申舟が宋に捕えられ、殺されたことに憤慨して「投袂」するに至ったのである。「投袂」には、こうした昂揚する感情が含まれるのではないか。注⑦参照。

②白虎通曰：『白虎通』崩薨に「天子崩、赴告諸侯者何。縁臣子喪君、哀痛憤懣、無能不告語人者也。諸侯欲聞之、又当持土地所出以供喪事、故礼曰、天子崩、遣使者赴告諸侯（天子崩じて、諸侯に赴告するは何ぞや。臣子の君を喪うに縁りて、哀痛憤懣して、人に能く告語せざる者無ければなり。諸侯之を聞かんと欲し、又た当に土地の出だす所を持ち、以て喪事に供すべし、故に礼に曰く、天子崩じて、使者を遣わして諸侯に赴告せしむ、と）」とある。

③憤懣 「憤懣」とは、どうしようもない悲嘆や煩悶に思い悩むことである。「憤」は、『説文解字』に「懣也（懣ゆるなり）」とある。また『論語』述而に「不憤不啓（憤せずんば啓せず）」とあり、何晏注には「憤懣」とある。「懣」については、『礼記』問喪に「悲哀志懣氣盛、故祖而踊之（悲哀して志懣え氣盛んなり、故に祖して之を踊せしむ）」とある。「憤」「懣」ともに、鬱屈していた感情が激発することをいうのであろう。

また、司馬遷「報任少卿書」（『文選』卷四十一）の李善注に「広雅曰、懣悶也。楚辞曰、惟煩懣以盈胸（広雅に曰く、懣は悶なり。楚辞に曰く、惟れ煩懣して以て胸に盈つ）」とある。

## ④ 劉琨重贈盧諶詩曰：

「重贈盧諶詩」(『文選』卷二十五)の第十三句・十四句に「中夜撫枕歎、想与数子遊。遊衰久矣夫、何其不夢周(中夜に枕を撫して歎じ、数子と遊ばんことを想う。我 衰えたること久しいかな、何ぞ其れ周を夢みざるや)」とある。劉琨はこの詩の中で、太公望(第三句)にはじまり、漢の鄧生(第五句「鄧禹」、同じく漢の陳平(第七句「曲逆」・張良(第八句「留侯」、晋の文公(第九句「重耳」、そして小白(第十句「桓公)」から先人たちの功績を讃えている。また李善は、彼ら「数子」について、「言数子皆能陳謀、以静乱。故已想之、而共遊(言は数子 皆な能く謀を陳ね、以て乱を静めり。故に已て之を想いて、共に遊ばんとす)」という。呂向は、李善の「数子」の解釈に賛同した上で、「言我衰矣、不能夢聖人周公之徒、為我陳策、以匡晋室(言は我 衰えて、聖人周公の徒、我が為に策を陳ね、以て晋室を匡さんことを夢みること能わず)」という。ここには老いさらばえながら、晋朝の復興を切に願う劉琨の思いが見える。

⑤ 百慮 「百慮」とは、さまざまの思いという意である。李善は「百慮」について、江淹「劉太尉(傷乱)琨」の一首前に収められる「苦雨詩」(『文選』卷三十一)に見えると注記する。この「苦雨詩」は、江淹「張黃門(苦雨)協」のこと。結句(全十四句)に「歳暮百慮交、無以慰延佇(歳暮れて百慮交わり、以て延佇を慰むる無し)」とあり、その李善注は、曹操の軍謀に参画した仲長統の詩(『古詩紀』卷十三。「述志詩二首」)を引き、「百慮何為、至安

在我(百慮 何をか為さん、至安 我に在り)」という。李善はその他、謝朓「酬王晋安一首」(卷二十六)の「百慮」についても、仲長統の詩を引く。なお、『後漢書』卷四十九・仲長統伝は、「百慮何為、至安在我。寄愁天下、埋憂地下(百慮 何をか為さん、至安 我に在り。愁を天下に寄せ、憂を地下に埋む)」に作る。

⑥ 寒樹 「寒樹」とは、寒い気候の樹木のこと。江淹と同時代の用例に、沈約の「為臨川王九日侍太子宴詩」があり、「雲輕寒樹、日麗秋原」とある。江淹は、寒い季節のおとずれとともに青々と繁っていた葉が枯れて零落していく樹木の変容に、年老いていく劉琨自身の姿を重ねたのであろう。

⑦ 攘袂 「攘袂」は、「投袂」と同様に袂をふるう行為のことである。既出の『左氏伝』宣公十四年から推察するに「投袂」は、奮起する感情を伴っていた。「攘袂」についても、『漢書』卷五十一・鄒陽伝に「臣窃料之、能歴西山、径長樂、抵未央、攘袂而正議者、独大王耳(臣 窃に之を料るに、能く西山を歴て、長樂を徑、未央に抵り、袂を攘げて正議するは、独り大王のみ)」とあり、その顔師古注には「西山、謂嶠及華山也。抵、至也。攘、却也。袂、衣袖也。攘袂、猶今人云掉臂耳(西山は、嶠及び華山を謂うなり。抵は、至るなり。攘は、却なり。袂は、衣袖なり。攘袂は、猶お今人の掉臂と云うがごときのみ)」とある。「掉臂」とは奮いたつさまをいい、劉良注に見える「奮袂」も、「投袂」「攘袂」と同義であろう。

⑧懷 『詩経』邶風・終風に「寤言不寐、願言則懷（寤めて言、寐ねられず、願いて言、則ち懷う）」とあり、その毛伝に「懷、傷也」とある。

⑨集注本は、「此乱」の横に「也傷」の二字が書かれている。

⑩集注本に見える「音決、袂、正世反」において、「世」字は「正：反」となっている。

21 22 【功名惜未立 玄髮已改素】

李善曰、劉琨重贈盧諶詩曰、功業未及建、夕陽忽西流。陸機東宮詩曰、柔顏收紅藻、玄鬢吐素華。

鈔曰、惜、恨也。恨素無功名不及衛青之徒、遠望而已、不得去、已年老也。

呂向曰、謂未能匡復晋室、而髮已白也。

李善曰く、劉琨の重ねて盧諶に贈る詩に曰く、功業未だ建つに及ばず、夕陽忽ち西流すと。陸機の東宮詩に曰く、柔顏紅藻を収め、玄鬢素華を吐くと、と。

鈔に曰く、惜は、恨むなり。恨むらくは素より功名の衛青の徒に及ばざるに、遠く望むのみにして、去るを得ず、已に年老ゆるを、と。

呂向曰く、未だ晋室を匡復すること能わずして、髮已に白きを謂うなり、と。

「校勘」

○李善曰 該当箇所無し。(尤刻本・胡刻本・国子監本)、「善曰」(明州本・秀州本・建州本)

○玄鬢吐素華 「玄髮吐素華」(尤刻本・胡刻本・国子監本・明州本・秀州本・建州本)

○呂向曰 「向曰」(陳八郎本・秀州本・建州本・明州本)

○未能匡復晋室 「未能匡復晋室」(明州本)

○而髮已白也 「而髮已白」(「也」字を欠く)(陳八郎本・秀州本・建州本・明州本)

「訳」

李善はいう、劉琨の「重ねて盧諶に贈る詩」にいう、「晋朝の復興という大業はいまだ達成するまでには到らないのに、日は暮れて太陽はいつの間にか西に傾き、わたくしは年をとってしまった」と。陸機の「東宮詩」にいう、「若々しかった顔は今では赤みがなくなり、黒々とした鬢髪は、白い花を咲かせたように白髪になってしまった」と、と。

『鈔』に曰く、「惜」は、残念に思うことである。残念に思うのは、劉琨が漢の武帝に重用された衛青の歩兵のように、功業や名声が及ばないわけではないのに、ただはるか遠くを望むだけで、自ら何もできずに、もはや年老いてしまったことである、と。

呂向はいう、いまだ晋朝を危急のときから救うこともで

きずに、髪はもう白くなってしまったことをいうのである、と。

〔注〕

①劉琨重贈盧諶詩曰：「功業未及建、夕陽忽西流」とあり、その李善注に「家語曰、孔子云、修事而能建業。注曰、建、功業。夕陽西流、喻將老之人也（家語に曰く、孔子云う、事を修めて能く業を建つ、と。注に曰く、建、功業なり。夕陽の西に流るるは、將に老いんとするの人に喩うるなり）」とある。また李周翰注には、「琨思復晋室、故云、功業未立也。夕陽謂晚景。喻己之老也（琨 晋室を復せんことを思う、故に云う、功業は未だ立たざるなりと。夕陽は晚景を謂う。己に之れ老いるに喩うるなり）」とある。劉琨は、晋朝の復興という大事業を成就させることがかなわないまま、いつの間にか年老いてしまった我が身を嘆いているのである。

②陸機東宮詩曰：『芸文類聚』卷十八・老部は、無題で「軟顔收紅藥、玄鬢吐素華。冉冉逝將老、咄咄奈老何（軟顔 紅藥を収め、玄鬢 素華を吐く。冉冉として逝くゆく將に老いんとす、咄咄として、老を奈何せん）」に作る。なお、『古詩紀』卷三十五は、この詩を「詠老」と題す。

③衛青 衛青（？、前一〇六）は、字は仲卿。河東平陽人であり、漢の武帝に仕えた。同腹の姉が武帝の寵愛を受けていたことが縁で漢室に入ることとなり、当時中原に攻め入っていた匈奴討伐の功績が認められ、大將軍となる。

また衛青はその生涯において、七たび北征している。『史記』卷百十一・衛將軍驃騎列伝に「最、大將軍青、凡七出擊匈奴、斬捕首虜五万余級（最ぶるに、大將軍の青 凡て七たび出でて匈奴を撃ち、首虜を斬捕すること五万余級なり）」とある。なお、衛青については、『漢書』卷五十五にも伝がある。

④匡復 「匡復」とは、存亡の危機にある国の復興に従事することである。漢の孔融「論盛孝章書」（『文選』卷四十一）に「惟公匡復漢室、宗社將絶、又能正之。正之術、（惟れ公 漢室を匡復し、宗社 將に絶えんとするに、又能く之を正さん。之を正すの術は、実に須らく賢を得べし）」とある。「公」とは、曹操のことである。

23 24 【時哉苟有会 治乱惟冥数】

李善曰、劉琨重贈盧諶詩曰、時哉不我与。陶淵明經曲阿詩曰、時來苟宜会。冥、幽冥也。数、歴数也。孫子兵法曰、治乱、数也。范曄後漢書烏丸論曰、天之冥数、以至於是乎。鈔曰、言太平之時且有運會。千年一期、五百年一運、此会時也。故尚書云、時哉不可失。言非人所知唯冥中以数知也。

音決、冥、正丁反。

張銑曰、言太平之時具有運理之道、冥味亦有定数、然非我所知也。

陸善経曰、見功業不立、因推於運數。運、數也。

李善曰く、劉琨の重ねて盧諶に贈る詩に曰く、時なるかな 我に与せずと。陶淵明の曲阿を経る詩に曰く、時来たりて苟しくも宜しく会すべしと。冥は、幽冥なり。数は、歴數なり、と。孫子の兵法に曰く、治乱とは、數なりと。范曄の後漢書烏丸論にいう、天の冥數、以て是に到れるかと、と。

鈔に曰く、言は太平の時 且く運の会する有り。千年一期、五百年一運、此れ会するの時なり。故に尚書に云く、時なるかな 失うべからずと。言は人の知る所に非ずして唯だ冥中に數を以て知るのみなり、と。

音決に、冥は、正丁の反なり、と。

張銑曰く、言は太平の時、具に當に運理の道有るべし、冥味も亦た定數有り、然れども我の知る所に非ざるなり、と。

陸善経曰く、功業の立たざるを見、因りて運數を推すなり。運は、數なり、と。

### 「校勘」

○李善曰 該當箇所無し（尤刻本・胡刻本・国子監本・秀州本）、善曰（明州本・建州本）

○劉琨重贈盧諶詩 「劉琨車贈盧諶詩」（「重」を「車」字に作る）（秀州本）

○時来苟宜会 「時来苟冥会」（尤刻本・胡刻本・明州

本・秀州本・建州本）

○數歴數也 「數曆數也」（尤刻本・国子監本・明州本・秀州本・建州本）、「曆」字のつくりの部分不鮮明。（胡刻本）

○張銑曰 「銑曰」（陳八郎本・明州本・秀州本・建州本）

○言太平之時具當有運理之道、冥味亦有定數、然非我所知也 「言太平之時且當有運會、治乱之道、冥味亦有定數、然非我所知」（「具」を「且」に作る。「治乱」を挿入する。「運理」を「運會」に作る。「也」字を欠く）（陳八郎本・明州本・秀州本・建州本）

### 「訳」

李善はいう、劉琨の「重ねて盧諶に贈る詩」にいう、「時」というもの わたくしとともにあるのではなく、浮かぶ雲のようにあつという間に過ぎ去ってしまうのである」と。陶淵明の曲阿を経る詩にいう、「まさに（仕官の）時が来たからには、とりあえず引き受けておくのがよいだろう」と。「冥」は、暗いさまのことである。「數」は、運命のことである、と。孫子の『兵法』にいう、「治まることと乱れることは、（人の知り得ない）運命なのである」と。范曄の『後漢書』烏丸論にいう、「天が定める人の知り得ない運命は、もうここまで及んでいのか」と、と。

『鈔』にいう、国家の安定している時には、しばらく運があつまるのである。その時というのは、千年に一度、五

百年に一度の周期であり、これこそ（人の知り得ぬ運命という）時にめぐり会うことである。そのため『尚書』にいう、「時がきた、これを逃してはならない」と。（つまり時機の到来は）人の知り得ることではなく、ただこれが運のめぐってくることなのだと思うしかないのである、と。

『音決』に、「冥」は、正丁の反である、と。

張銑はいう、天下が安定している時、それはまさに国の統治が行き届く道があるけれども、（一方）天下が混沌としている時もまた、定められた宿命があるのだ。しかし（それは）わたくしの知り得ることではないのである、と。

陸善経はいう、晋朝の復興がうまく成就しなかったことを目の当たりにし、そのため（それが）運命であろうと思うのである。「運」は、数と同じことである、と。

〔注〕

①冥数 『説文解字』に「冥、幽也」とある。「幽」は、暗いさまをいう。また『詩経』小雅・無将大車に「無将大車、維塵冥冥（大車を將<sup>ま</sup>むる無かれ、維れ塵 冥冥たり）」とあり、その鄭箋に「冥冥者、蔽人目明令無所見也（冥冥は、人目の明らかなるを蔽いて見る所無からしむるなり）」とある。『楚辞』九歌・山鬼（『文選』卷三十三）には「雲容容兮而在下、杳冥冥兮杳冥晦（雲 容容として下に在り、杳 冥冥として 杳<sup>ま</sup>も晦し）」とあり、その呂延濟注に「杳深也。晦暗也。杳語詞也。言雲氣深厚冥冥使昼日昏暗（杳は深なり。晦は暗なり。杳は語詞なり。言は雲氣

深厚なれば冥冥たりて昼日をして昏暗ならしむ）」とある。「数」は、運命のことをいう。『文選』卷五十三・運命論に「吉凶成敗、各以数至（吉凶成敗、各おの数を以て至る）」とあり、李善注は「数、歴数也」とし、続けて『尚書』大禹謨「天曆数在汝躬（天の曆数汝の躬<sup>み</sup>に在り）」の孔安国伝を引いて「歴数謂天道也（歴数は天道を謂うなり）」とある。また劉良注は、「歴数謂運数至也（歴数は運数の至るを謂うなり）」としている。つまり「冥数」とは、人間にははかり得ない宿命のようなめぐりあわせのことをいうのであろう。

②劉琨重贈盧諶詩曰：劉琨「重贈盧諶一首」（『文選』卷二十五）の第二十三句・二十四句（全三十句）に、「時哉不我与、去乎若雲浮（時なるかな 我に与せず、去るかな 雲の浮かぶが若し）」とある。該当箇所<sup>（一）</sup>の李善注は、「密康「幽憤詩」を踏まえていることをいい（「時不我与」、続けて「雲浮言疾也（雲の浮かぶは疾なるを言うなり）」と「浮雲」を説明する。また、李周翰注には「歎時節易度、如雲過也（時節の度り易きこと、雲の過ぐるが如きを歎くなり）」とある。ここでは、両注ともに雲が時の流れの速さに喩えられることをいうのである。

③陶淵明經曲阿詩曰：「曲阿詩」とは、陶淵明の「始作鎮軍參軍經曲阿詩」（『文選』卷二十六）のことで、詩題に見える「曲阿」は、現在の江蘇省丹陽県の地名。題下の李善注によれば、陶淵明は鎮衛軍の將軍の參軍として赴任する途中、この地を通りすがったとされる。当該詩には

「時来苟宜会、宛轡憩通衢（時来りて苟しくも宜しく会さんとすべし、轡を宛げて通衢に憩う）」とあり、李善注は盧諶の「魏子悌に答う詩」の「遇蒙時来会（遇たま時来に会するに蒙る）」を引く。また張銑は、「言時命既来且宜相会、将行徘徊蓄轡息於通衢（言は時命 既に来りて且に宜しく相い会すべく、将に行かんとするも徘徊し轡を蓄えて通衢に息う）」という。つまり両注は、陶淵明の仕官（「通衢」の「時」をむかえた詩を引いて、「時」とは「時機」がまさに到来していることであると説明しているのである。

④ 歴数 集注本は「歴数」に作るが、尤刻本・国子監本・明州本・秀州本・建州本は「曆数」に作る。「歴」「曆」の両字が通じることから、ほぼ同義と考えて良いだろう。「歴数」については、注①にある。

⑤ 孫子兵法曰：孫子の『兵法』とは、『孫子』のこと。『孫子』勢に「乱生於治、怯生於勇、弱生於彊。治乱数也、勇怯形也、彊弱形也（乱は治より生じ、怯は勇より生じ、弱は彊より生ず。治乱は数なり、勇怯は形なり、彊弱は形なり）」とある。「治乱」とは、治まることと乱れることをいう。なお「治乱」の語は、集注本をのぞく、陳八郎本・明州本・秀州本・建州本の張銑注にも見える。

⑥ 范曄後漢書烏丸論曰：「烏丸」とは、烏桓ともいい、蒙古の遊牧民族である。前漢の初めに東胡が匈奴に滅ぼされたことで、烏桓と鮮卑の二つの民族に分裂した。『後漢書』卷九十・烏桓伝に「論曰、四夷之暴、其執互疆矣。匈奴

熾於隆漢、西羌猛於中興。而靈・獻之間、二虜迭盛、石槐驍猛尽有单于之地、蹋頓凶傑、公扈遼西之土。其陵跨中国、結患生人者、靡世而寧焉。然制御上略、歷世無聞、周・漢之策、僅得中下。将天之冥數、以至於是乎（論に曰く、四夷の暴、其の執 互いに疆し。匈奴は隆漢よりも熾かにして、西羌は中興よりも猛し。而して靈・獻の間、一虜迭に盛んにして、石槐は驍猛にして尽く单于の地有り、蹋頓は凶傑にして、遼西の土に公扈す。其の中国を陵跨し、患いを生人に結ぶは、世として寧きこと靡し。然れども上略を制御し、世を歴るも聞くこと無く、周・漢の策、僅かに中下を得。将に天の冥數、以て是に到るか）」とある。

⑦ 尚書云：『尚書』泰誓上に「商罪貫盈、天命誅之。予弗順天、厥罪惟鈞。予小子、夙夜祗懼、受命文考、類于上帝、宜于冢土、以爾有衆、底天之罰。天矜于民、民之所欲、天必從之。爾尚弼予一人、永清四海。時哉弗可失（商の罪 貫盈すれば、天命じて之を誅す。予 天に順わざれば、厥の罪 惟ち鈞し。予小子、夙夜に祗懼し、命を文考より受けて、上帝に類し、冢土に宜し、爾 有衆を以て、天の罰を底す。天 民を矜み、民の欲する所、天 必ず之に従う。爾 尚わくは予一人を弼け、永く四海を清めんことを。時なるかな 失うべからず）」とあり、孔安国伝は「言今我伐紂、正是天人合同之時不可違失（言は今 我紂を伐たんとす、正に是れ天人 合同の時にして、違失すべからず）」という。「我」は周の武王（文王の子）、「紂」は殷の最後の王のことである。

⑧冥昧 「冥昧」とは、暗く曖昧とした状態のことである。『易緯乾鑿度』卷上に「一陽二陰、物之生於冥昧、氣之起於幽蔽（一陽二陰、物は之れ冥昧より生じ、氣は之れ幽蔽より起る）」とあるように、もともとは物事が混沌としていたことであった。張銑注では、「太平」に呼応する形で「冥昧」が用いられているため、ここでは天下の混沌とした状態と訳した。

（筑波大学大学院人文社会科学科博士課程）

『文選集注』江淹「雜体詩」

（二〇一一・一二年度）演習参加者（五十音順）

荒井 禮（あらい・れい）

加藤 文彬（かとう・ふみあき）

逆瀬川 彰子（さかせがわ・あきこ） 劉琨担当

重野 宏一（しげの・ひろかず） TA